

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十一年九月二十五日 印刷
昭和四十一年十月一日発行 (毎月一日発行)
(第一三三号)

川柳塔



No. 13

創刊一周年記念・路郎賞発表

十月号

品質・処方 を改良した 新しい ポポンSを 発売しました



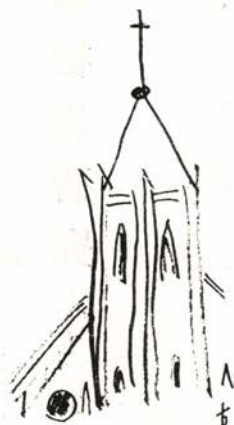
シオノギ製薬

大阪文化祭才18回川柳大会

文化の秋を飾る大阪文化祭川柳大会は、ことしも次のとおり開催いたします。
初心者の方も気軽に作品をお寄せ下さい。また、大会へは、どなたでも応募の
有無にかかわらず、ご来場下さるようご案内いたします。

主 催	句 集	賞 給	締 切	投 句	閉会の辞	席 題	兼 題	講 演	開会の辞	会 場	日 時
大阪府・大阪市・大阪府教育委員会 大阪府教育委員会	一〇〇円添付 入選句集をご希望の方は投句の際	席題・兼題共優秀句に、府知事・大阪 市長・大阪府・市教育委員長から贈呈	11月10日着限	各題ごとにハガキ1枚に2句ずつ 住所・氏名・雅号を明記	西川 柳 宏 子	当日2題発表(1時30分しめきり)	「赤電話」 生島 鳥 語選 「流」 岡 橋 宣 介選 「ベトナム」 片 山 雲 雀選 「祭」 中 島 生々庵選 「ハイウェイ」 堀 口 槐 人選	作家 秋 田 実	上 保 金 愚	中央公会堂(3階集会室) 司会 西 尾 栗	昭和41年11月20日(日) 正午開場午後1時開会

今月のことば



中島生々庵

◎七月十日に路郎忌、八月六日には水府忌と大阪では引きつづいて川柳大会がもたれた。そこに集った人達が「一年位はほんの一寸の間だんな」と挨拶を交わしていた。

◎なんでもない日常しよっちゅういいならさされた言葉ではあるが、この場合この柳友たちにとっては身近かな切実の言葉であった。

◎四十数年前の大震災。二十一年前の原爆や終戦の日が、ともすれば遠い記憶として恐ろしいスピードで遠のいてゆく。

◎光陰矢の如しという言葉もある。またこの節では、天文学的数字分の一秒の速さでシャッターを切るカメラが出来る世の中である。然しそんな速さより、もっと、もっと速いのは日月の天を走る速さであり、そのまた日月

が天を走る速さよりも、さらに、さらに速いものが、人間の寿命の移りゆく速さであると仏陀は教えて「無常迅速」といつている。

◎つい先達、八月十四日「朝日」の社説に「十年一むかし」ではなく「一年七むかし」といえるかも知れぬとあった。実に同感である。そしてその次ぎに「ある学者の推計によると、人類がこれまでに作った生産高をかりに四十兆ドルに見積るならば、その同じ分だけを向う四十年間で作り出すだろう」と報じている。一年といい、一月といい、一日といっても戦前と今日では、その時間の価値は大変な違いである。一秒間でも浪費は出来ぬ。

◎「余年十年、三千六百五十日」という句が路郎忌の朝出来た。

(九月五日記)

川柳塔十月号

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば

中島生々庵……………(1)

創刊一周年を迎えて

中島生々庵……………(4)

川柳塔

(同人作品)……………中島生々庵選……………(6)

同人特集

路郎賞が

きまるまで

中島生々庵・清水 白柳・北川 春巢
若本多久志・西尾 栞・川村 好郎……………(22)
松江 梅里・菊沢小松園……………(順不同)

近詠

麻生 葭乃……………(31)

川傍柳初篇研究……………(四十)

前田喜代人・岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄……………(32)

川端 柳風・故高須啞三味・丸 十府・岡田 甫

北京の紅衛兵……………(大陸放浪)……………東野 大八……………(44)

秀句鑑賞……………(前月号から)……………後藤 梅志……………(42)

東郷さんの思い出	福井野迷路	(41)
いのちある句	戸田古方	(46)
雅号ぶっちゃけばなし	仲 どんたく	(61)
痴 盲 録	高 鷲 亜 鈍	(31)
九月号に寄せて	池田あや子	(45)
近 作 柳 樽	松江梅里選	(34)
大萬川柳「ダブル」入選発表	清水白柳選	(52)
無 題	山上千太郎	(30)
初 歩 教 室	菊沢小松園	(50)
★ 柳 界 展 望	(薰風)	(54)
★ 本 社 九 月 句 会	(庸佑)	(56)
★ 各 地 柳 壇	(文秋)	(59)
一路集「手ぶら」	林野甍光選	(48)
「体験」	若林草右選	(48)
「垣」	国弘半休選	(49)



創刊一周年を迎えて

— 感激・欣喜・祈り —

中島生々庵

「川柳塔」が満一年の誕生を迎えた。他の人から見れば僅か一年間だけの事であろう。しかし引き伸ばすように日々を見守る親心から云えば、いろいろの意味でなみ大抵の一年ではなかったのである。殊に生れて初めての一年目といふ誕生日は、十年目から十一年目までの一年間とは話にならぬ程のきびしさを持つ内容の一年間である。それだけに関係者としての私達にとっては感激というか、欣喜というか——そして当然のことではあるが、将来への祈りというか、まことに文字や言葉に尽せないものがあるのである。しかも「川柳塔」の場合には更に一つ別な意味での感激、欣喜、祈りの深刻さが加っていることを私達の頭にはわかりすぎる程わかっている。それはいわずと知れた、「川柳雑誌」の流れをうけついで誕生した「川柳塔」であるゆえにである。「川柳雑誌」が四百六十号で終止符を打ったその翌月にはもう創刊号を発刊したのが「川柳塔」であるゆえにである。

この七月十日第一回路郎忌に際し、私が申し述べた通り路郎師の巨大な足跡を今更のように見なおし受けとった事

は偽りのない心情であり、そしてそれは川柳を通しての師弟関係の意味以外にも、人間麻生路郎、社会人麻生路郎としての偉大さにも打たれたのである。これは「川柳塔」を自ら育ててみて初めて教えられた尊いお訓しであり、痛棒でもあったのである。子を持つてから知る親の恩である。現在この「川柳塔」誕生について渾身の努力を続けて来たわれ等の「同志」の大半が「川柳雑誌」でわらじをぬぎ「川柳雑誌」の釜のめしで育てられたものであるに違いないのであるが「川柳雑誌」時代の日暮らしが四百六十余号という「お家ご安泰」の数字に魅せられてか、主宰路郎師が越して来られた幾山河のけわしさ、きびしさを忘れがちであったことも或る程度認めざるを得ないのである。勿論全然忘却していたり感知せなかったわけではなかったのであり、心ある者の中には数年前から路郎師百年の事ある場合の心構えや具体策について真剣に考えてもみ、先生と御相談したりした事も再三であったのである。しかしその真剣さも愈々というところまで追いつめられるまではほんとうには醒めないという悲しさ、それになんといっても、師

は健在、社は隆昌という時点にあって、最悪な場面に処するの策を具体化するというのは、言うべくしてなかなかの難事であったのも致し方ない事であった。

あれ、これしてる間に「先生の永眠」という「現実」のきびさは遠慮会釈もなくあらわれた。一同文字通りに呆然自失を露呈したのは、「先生の永眠」を全く予期してなかった突発事かのようにあって、自分の頭を疑うより外なかった。「どろ繩」という言葉はこの際には当たらない。少くとも打つ手の一つ二つは用意してあった筈であった。それが結果的には「どろ繩」式になりかかった。ここで私達が一番まつさきに警戒した大切な事は、たとえ「どろ繩」であったとしても、せめてその「繩」をあざなう一本一本を出るだけ筋金の入ったものにして、白蟻に荒されたりする恐れのないものにする努力が必要であると気付かせて頂いたのである。しあわせにも「川柳雑誌」時代の不朽洞会から引きつづいての同人諸子は勿論、新しく参加して下さった数多い「同志」が予期以上に熱烈な信念と固い結束を示され、これに加わるに他吟社からの極めて暖かいご協力によって、今日めでたくも第一回の誕生日を迎え得たのである。

これが私の心からの「感激」でもあり、手ばなしの「欣び」でもある。しかし思えばやっと階段の一段を上ったばかりであって「塔」の前途はまことに通けくも、けわしいのである。大切な事は一層敬虔な「祈り」を献げ、同時に発足第一年目という折り目こそ「川柳塔」の生涯にとつて最も重要な時点であることを自覚し、握られた「同志」の手をますます固く精進邁進しなくてはならぬ事である。その「同志」に向って私は老婆心にも似た平凡な苦言を思いついた。それは「初心忘るべからず」である。初めは、「脱兎」の如く終りは処女の如くでは「川柳塔」の前途は惨め過ぎるというのである。そのためには「己れの能力」

を充分頭に入れて、その「能力」の限界を忘れてならぬことである。世の中にはこの越えてはならぬ限界を越えたために破滅の道に自らを誘い込むという例は枚挙にいとまない程私達に教訓を垂れている。

昔、ソーナという一人の仏陀の弟子が、或る日仏陀に向って「私は仏陀の弟子のなかでも私はどう一生懸命にはげしい修行しているものはないのに、いつこうに悟りの境地にいたることが出来ないのはどうしたことだろうか」と思うままにうちあげた。仏陀は「ソーナよ。そなたの弾ずる琴の絃を思ってみよ。絃のはりかたは余り強くなく、余り弱くなく、調子にかなうように整えることが大事である。仏道の修業も刻苦にすぎればまた懈怠におもむく。ここでもその中道をとらねばならぬ」と訓したそうである。（仏教百話―増谷文雄氏による）

私はこのソーナに与えた仏陀の言葉を噛みしめて、背のびしない歩みを、「川柳塔」に導いてゆきたいと願っている。そしてその上更に大変必要なことは「川柳塔」が歩むべきその進路の方向という事である。船頭多くして舟進まずでは労多くして彼岸に達するのは困難である。しかし、「川柳塔」の進むべき指針の方向をここに簡単に定義することは至難の中の至難事である。今私の頭にはっきり浮ぶのは芭蕉の「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ」といった言葉である。

「川柳塔」は「川柳雑誌」が歩いた跡ばかりを求めず、「川柳雑誌」が四十年間求めつづけたところを求めてゆくべきであるというのである。そこに「川柳塔」の大体の方向が示されるのではないかと思うのである。

極めて粗雑の筆の運びで恐縮であるが、今日一周年を迎えた「川柳塔」の「感激」と「欣び」と「祈り」の一端を申述べた次第である。



中島生々庵選

大阪市 正本水客

夾竹桃まひるの団地つづくなり

じよろじよろと胡瓜がのびて雲の峰

鞍馬にて(七句)

わらべうた軒端を水の走る道

北山杉ひときわ雨の音が過ぎ

谷の音も聞こえずなつて雨あがる

山門をくぐれば空のたたずまい

くらま石 木立のしづくはるかなる

木の根道げに遮那王のくつのあと

僧正谷 雨も寿永の色なるか

平八にて

幕末のような仲居と倉座敷

今治市 越智一水

山開き神主さんを押し上げる

ピカドンの日にピカドンの詩を愛し

向日葵に雲一つなし原爆忌

暑い日へ熱い茶を飲み身を守る

世知辛い世に風鈴の音はやさし

トンネルの風にセツトをくずされる

せせらぎに歌を流してテント村

笠岡市 木山遠二

人間を不埒と蜂が追いかける

怒った蜂に人違いで刺され

としよりのくせに蜂なんか刺され

蜂が刺したのを見舞うて笑い合い

陰陽石そう云えばそう見えるなり

陰陽石衆目を浴び可憐なり

金魚すくい掬えないのでおもしろし

大阪市 不二田 一三夫

貧乏を低額所得者とおだて

ざるそばを毛糸のようにもつれさせ

神仏がきらいで通せる有難さ

勝山小学校の盆おどり作詩

お遊戯の手つきが輪になる盆おどり

櫓から音頭とる子は六年生

月の出も知らずシヤンシヤンおどりの輪

長浜光女史のスポーツと力の書道展

デッドボールのような文字に面くらひ

青森市 工藤 甲吉

簡単にゃ死んでおれぬと根無し草

昇格は次に辞めろということさ

ペコペコペコペコ妻や子はなんと見る

心中の棺はベニヤで間に合わせ

百姓を殺すシベリア高気圧

平だけで踊る阿呆に飲む阿呆

下関市 桜川 不水

銀行は札を扇にして数え

菜園風景

窮屈なところで西瓜は腰を据え

環境が悪いと胡瓜ひん曲り

明日あたり手頃な茄子へ水をやり

枝豆よ早よ成れビール待つている

桃や栗柿も豊年腰が伸び

高槻市 傍島 静馬

日まわりとカンナ烈日にいとむ

ママの庭近所でもろた花ばかり

お隣りも水瓜買うてる大掃除

ママの柄着でいて迷子すぐわかり

倒産に落した髭をもう忘れ

開け閉ても静か なるほど女形

大阪市 後藤 梅志

産地からの西瓜が駐車違反なり

変りはてた世には団扇のなつかしく

二十日間禁煙に思う

たばこヨキカナ自己を客観するゆとり

人の世の姿ベンチに眠るもあり

ホドホドにしておくことのむつかしき

二日つづきの雷鳴夏を蹴散らかす

兵庫県 小西 無鬼

手刀で切る蜘蛛の巣へも気合

量感も添えるジョッキの重さなる

規定通り取ればガメツイように云い
降りそうで降らない空も政治型
飼い主はなし野犬の自由なり

岡山県 浜田 久米雄

ゴム長がまだまだ歩く気で買われ
振り出しに舞い戻るまで手間が要り
生きていてよかつた秋の酒を酌む
先方の真意わかつていてじらし
しのびよる秋を細腕なでて待ち

出雲市 尼 緑之助

残暑いよいよ天井に圧されてい
ひとり来ていつそさみしいビヤガーデン

路郎忌大会

慶沢園故人のこのこ出でたまい

孫の死

突如消された生命八カ月

あどけな笑う土くれに埋つても

高槻市 若 柳 潮 花

舞踊「傾城」より

傾城の胸におもみのかかる帯

逢いたさをこらえる袖の紅が燃え

はすに寝た扇へかがる行燈の灯

顔ぐつと出して取らせるつけまつ毛
眼のふちに舞台の紅が残る朝

岸和田市 内 藤 き さ 子

真夏 真昼 犬病院もひつそりと

ひよいとのぞけば仔犬もひよいとのぞくなり

状差しと不仲になつた新ハガキ

善人のかげにかくれていた短氣

暑さピーク子の無い不服に有る不服

豊中市 戸 田 古 方

釣上げて誰も魚の名がいえず

アルバイトしてから集金日もおぼえ

喰うてちよんでええやないかといいはられ

計画が狂うたままのバケーション

ひとりつ子やつぱりひとり性が性に合い

尼崎市 長 谷 川 三 司

(追憶旧談) 連句

老斑の浮く掌でつまむ桜餅

あの人の形身と抜いて見せる指

言うことが昔変らぬ鉄火巻

なにもかも海に捨てたと海に立ち

俸せは海見る心海を見る

大阪市 山川阿茶

下駄箱の靴までぬくい昼下り
ジャズ喫茶の帰えりに蛸焼き喰べている
三十万払った義歯を見せに来る
ミツシヨンへ通い古美術仏様
バンド処理味方の二壘ヘタツチする

西宮市 樋口舟遊

八月の太陽に甘える雲がある
樹にきずを付け樹の限界をためす
頂上に足うばわれて抵抗す
炎天のおのを責めて歩を早め
懸崖になる八月の芽は摘まれ

大阪市 中島小石

終戦記念日

黙禱の臉へ亡弟立姿

黙禱の両陛下ご心中をおしはかり
初盆へ又思ひ出の庭の花
暑うても秋を知つてか虫の鳴く
虫しぐれききつつ眠る今日も無事

堺市 高崎雄声

二十年ぶりの珍客

重文の書添の松見せてあげ

さびしさは市電のレールだけ残り

乗りおくれ走つて見送るだけのこと

冷蔵庫充たすためのビールはしんどいよ

うちの子もやつぱり好きな水溜り

出雲市 中川晃男

亡母追吟

母逝きて我家の味も変りけり

明日も天気母さんの星あれかしら

泣き伏してふるう襟足見つめとり

人の目を口を氣にして狭く生き

よく食べてよく寝て頭にくくなり

下関市 国弘半休

夫婦げんか三態

夫婦げんか孫割込ます嫁で和ぐ

夫婦げんか時計も寝ていたので不覚

夫婦げんか茶碗が飛んで割れて寝る

ベトナムの辺りが痛むと地球がこぼす

会釈するだけが言葉の娘に育ち

竹原市 杉原愛鳩

云い分がある盃の急ピツチ

集金が見かねた妻の針のメド

あきらめて猫がはなれた金魚鉢

よその年よりへやさしい事が云え
あぜ一つへだててうちの稲の出来

大阪市 金井文秋

俄雨夜店は本屋から慌て
立読みに来てキャンデーの汁こぼし
二三冊読んで全集積んだまま
子ぼんのうパンチの効かぬ眼で叱り
寝過ごした朝寝苦しい夜を云い

熊本県 有働芳仙

停年が近い逆ろうまい逆ろうまい
週刊紙の知恵で渡れる世と分り
痴話喧嘩子供テープにのせていた
一握りの砂さえ指間からこぼれ
図書館で一日我子の名を選び

熊本市 楠田英子

野良犬の何思うらん走りゆく
心にもない合つちはうなずいて
五十近し名もなき民の我を知る
泣いて笑つて過去ともなればおかしくて
幼児を大きくしたよな寝相なり

新居浜市 安藤桂仙

屠殺さる順をばんやり牛は待ち

板に錆残して釘も腐ちており
ふと我れに帰れば膝に灰が落ち
豹変に移る紫煙を輪にふかせ
すぐばれる嘘でつくろいして戻り

芦屋市 丸川初甫

御見舞リンゴの数程名を並べ
花柳章太郎を偲ぶ(寒菊寒牡丹)
皮足袋で女形になる気の足作る
艶姿襖の影は男です

新派(秋の雪)

松蔭の初恋に降る萩の雪
入牢を凜々しい緋で見送られ

竹原市 山内静水

静けさは二人きりなり毛越寺
衣川眼下に歴史をたぐりよせ
相合傘旅の二人にさせてくれ
山寺の静けさガイドにかき消され
風鈴の音色も流石みちのくに

鳥取県 清水一保

愛情を知らぬ雑草ばかり伸び
風鈴の音まであえぐ三十度
うなどんの隣りで素うどんそつと喰べ

何不足有つたか金魚死の抗議

流行はこんな小川に海水着

富田林市 浅川 八郎

白足袋をぬいだ宮司の飲みつぶり

阿古屋貝真珠育ててほつとかれ

乱れてる靴音にホツトするも母

変えた医者その医者も酒やめと言う

叱らずに煽てて孫に賞められる

神戸市 仲 どんたく

B Gが鼻で笑つた小ジョツキ

墨染をからげて盆の僧の汗

癩癩は会社でのこと糸を垂れ

長期出張を送る

御苦労と云うほかは無し旅へ出し

N氏結婚

遂に射て射られて今日の初の旅

小松市 関戸 宗太郎

衣食住足り仏壇は飾り物

気まぐれな公民館の電気時計

頑張つてののしりなまけてこまをすり

土蔵ぶち抜いて庭までモータープール

夏の風裏まで抜けて旧杜宅

倉敷市 野田 素身郎

同席わずか一駅美人降り

クーラーをつけて帰宅が早うなり

半分はやけくそ炎暑へペタル踏む

いやらしいことしてチツプも置かず

弁当を残して子供にとがめられる

諫早市 川岡 靈眼子

中元のように時々引出され

相談受けたことある熊沢天皇死す

逝けばつまり気の毒な人

この世では咲かぬ苗木を持ち合わせ

子からまで気狂として見送られ

天皇が拝んでくれた日もあつたツケ

善通寺市 岡田 拳法

主治医より手術を勧められて

気安うに手術するかと他人なり

妻や子を思えば手術あるばかり

様子見ますかと手術日定まらず

寝ていれば意欲が消える正座する

思いきり抱きたいお前が悪魔でも

伊丹市 小川 静観堂

限界に來たなとおもひ横になる

鰻には相済まぬ日がめぐつて来
終着駅それから先きはどう行くか
どのへんがよからうか夫婦の定年制
この箱は何んやと小鳥のぞき込み

大阪府 早川清生

鳥の学者は禽の眼をもつ
府政涸れつづけて海に青さなし
金できてからの詩人も何か書き
ベトナムの沼英雄の死などない

岡山市 服部十九平

多角経営シーズンオフのない暮し
政治的配慮で真相歪められ
台風情報島の名前を覚えさせ
昼めしを正午に食べて店は閉

大阪市 橘高薫風

かんと鳴るもののあるなり恩師の忌
いぎたなき寝相の昼寝目覚め良し
おしやれな子のてるてる坊主までおしやれ

海士夫樹氏へ

お好み焼を裏返えずに似 人生は

倉敷市 木村千容

一人者にも自己満足のふしがあり

目にあまることもあろうに天てらす
凡人の得意の裏にある隙間
夏姿されど一分の隙もなし

西宮市 若林草右

三文の早起き蜘蛛の巣にひつかかり
まんまるくなつて毛虫は身を護り
お言葉の通りのボロ傘貸してくれ
貧乏ひまなし欠伸の値打ちかみしめる

岡山県 直原七面山

折角登つた山で転落

ネジがゆるんだように父ちゃん酔っぱらい
気まずさをほぐす使いに孫をたて
音と言う音みな消して積る雪

児島市 本田恵二朗

百メートル二十五秒でこ来賓

相談へ腹芸半日貸してやり

交叉点通つたらシャツクリ止つてた

熱帯魚意味なく動き陽を知らず

京都市 大鶴喜由

結果から見れば呉であり越であり

雑草につられて伸びた女郎花

母は娘を見守りながら盆踊り

阿波踊り鼻の先まで手が伸びる

大阪府 西 いわを

金魚も遊んでは居ず餌を捜す
行き来せんのもええもんや言うてたで
舞妓はんの夢でも京へ見にお出で
昼寝から覚めて米研ぐ妻のるす

岡山県 田 村 藤 波

瘦せとれば涼しかろうとひやかされ
聖域に流す奉仕の汗涼し
辛らつな批評を尻目に物価高
宝籤十年買うて見切りつけ

大阪市 本 多 柳 志

言い勝つた悔ライターが見当らず
族ごろも

宿浴衣名もない橋の風に立ち
眠られぬ月へ河鹿を聞きに起き
ぬぎ捨てて洗うに惜しい旅のしみ

大阪市 大 坂 形 水

健康法会社へちようど一万歩
冷房に勤めて合のズボン下
喧嘩する相手ではない払つとく
踊りの輪夕立ぐらいかまわな

室戸市 奴 田 原 紅 雨

男ものの時計を嵌めてビール飲む
台所プラスチックの勢揃い
りようまちへ一足先に秋が来る
新妻に墓のうしろも見せておき

愛媛県 渡 辺 暁 童

期限付退職願提出

退職願マジックインキでも通り
惜しみなく働く趣味の二十年
退職金ああ人間の価値きまる
カットする一こまもなくゴールイン

大阪市 福 井 野 迷 路

渡りに船 福祉事業の手があつた
住む土も墓場の土も値上がりし
春闘も米価闘争位まで
只一つ哲学の道大阪城

大阪市 児 島 与 呂 志

道連れの女も車も借りただけ
夏やせへビールの泡が溢れたり
夏休みプールサイドで孫監視
帰郷する列車にまじるサン格拉斯

大阪市 西 出一 栄

望郷へいつもの位置に同じ星
夏バテの咽喉は果物だけ通し
鈴虫のかえり損ねたまま立秋

娘の義弟外遊

視野広い男になれと羽田まで

布施市 本 多 清 人

女性群強し終電の高笑い

吊皮も持たず袖なしよろけとり

連鎖反応とは一瞬にマツチ箱

ターミナル年甲斐もなく待ち呆うけ

青森県 木 村 涼 人

オールスター兄弟垣にせめげども

雑草がせせら笑っている冷夏

義理に相場あつてお土産買い分ける

みちのくは冷夏農夫の無精髭

豊中市 寺 田 花 宵

お互いと思えど先に礼を言い

油虫女世帯を脅やかし

屋上はころつと変り南風

さよならを言わさぬための気をつかい

京都市 都 倉 求 女

海の碧だけは変らぬ故郷の夏

ふるさともああ大資本の眼を感じ

夕焼けの中から秋がこぼれて来

掛け替えた樋に夕立が謳つてゐる

奈良市 宮 口 笛 生

転車台無事故で帰る朝があけ

嫌われて蒸気機関車夏走る

蒸気機関車の前で退職写真撮り

鉄道学園に入園

延燈願い出しハッスルも試験前

大阪市 室 谷 鉄 舟

我が影が足にまつわるアスファルト

一匹にこだわすぎる蠅叩き

気安めは本気で金を借りに来た

使う当てないのにヘソクリ貯めている

新居浜市 小 林 孝 正

喰うに困らぬ金魚で鉢に狭く生き

胃に何もなかつた母子心中とは

人間の弱さ外車に守札

停退へ丹前を着て坐つてみ

大阪市 河 井 庸 佑

得心をさして動かすコツも知り

懇談会ついでに成績聞いて去に
洗濯機回して勉強のぞきに来
転校のひとりが教室かき回し

大阪市 天 正 千 梢

週二回休みへ財布とじたまま

プラン立てテント飯盒と借りあるき

キャンバスへ入道雲がのつて来ず

深い溝出来ても年子に子が生まれ

大阪市 水 谷 竹 荘

朝刊の持ちにげ夕刊もうとらえ

粗品だけ貰いに廻る百貨店

渡し船走つて来る客待つてくれ

老妻は明治の頃をほめちぎり

美弥市 安 平 次 弘 道

匿名の善意へ記者のおせつかい

城下町古きを残せば町すたれ

千ばつへすねる胡瓜のよく曲り

盆栽のある日自由が欲しくなり

ハワイ 築 山 快 夢 起

体重計まず安心の顔で降り

およばれの刺身へ蠅が二匹おり

大体は感でわかれると云う視察

百歳會長生したい顔ばかり

守口市 羽 原 静 歩

長崎鼻

焦熱の地獄へ南風吹き寄せる

指宿白水館

お惣菜アメリカ式につき分ける

高千穂神州旅館

高千穂の酒はカツポで受けて飲み

阿蘇山草千里

肥後牛のとまるも行くも草千里

鳥取県 森 田 布 堂

白髪一本見つけて妻は落ちつかず

落選のパパは議場で強かつた

いい嫁はないかと急用呼び止める

今買えば五割引きだと客をつり

岡山県 横 山 一 声

自家用車墓参の故郷の道せまく

ふるさとのビールは井戸の水で冷え

昼寝もう起きよとばかりにハイ叩き

恋人の合図におどりの輪をはずし

愛媛県 村 上 旭 童

早 抜

赤い月いつまでつづく夏のてり

自転車で帰る土工へ夏の月

残業の分を飲んだら生きられず

枯れるまでほつておけないのも農夫

泉大津市 高津 徹也

杵足に今は誤解のとけた線

承知していますと女金をとり

自信家のたかが積み木のようなもの

有難く名刺をしまふ商魂よ

篠山市 遠山 可住

仏はんお布施に千円いるんです

一息に飲んで妓を嬉ばし

米の値はあなたまかせの穂が揃い

子が無うて白壁白く暮れるのみ

枚方市 宮川 珠笑

波に身を委ね終日眠りたし

泳ぐ人絶えて小浪が岩にざれ

借りに来て昼寝済むまで待たされる

六甲へ来てもやつぱり遠い星

岡山県 藤原 秋月

八起きめを頑張っていた甲斐があり

切り札も効かず札束ちらつかせ

気休めとわかる言葉に救われる

水屋は暑いと言わず汗を拭き

宝塚市 小島 無聖

花莫産は日本の匂い昼寝する

汽笛くんそう淋しそう鳴らないで

噴霧器の緋の肩に虹が立ち

もの怖じず見捨てる少女毒婦めき

大阪市 森本 良夫

一回転した寝相とは気づくまい

暑い暑いとび込むように客がくる

夏の高校野球見る

背番号汗によごれた九回裏

出場のどの学校も勝たしたい

平田市 久家代仕男

ダム放水

佐久間ダム怒る雪崩の水しぶき

豊川稲荷

杉古木寄進職も雨に濡れ

夏の空暑さを吸うて暮れかかり

うなぎ焼く煙を隣りにうらやまれ

鳥取市 藤本 礎山

皮張りの椅子へ昇格深くかけ

交際をする程巾の広さ見せ

思い切る時期と男の意地が知り

好きだった人の面影娘に求め

和歌山市 西尾義一

おはなはん見たさに休日早起し

太鼓判押した尻から不渡りし

税務署も罪ほろぼしに阿波踊り

阿波踊り遠路はるばる阿呆になり

名古屋市 吉田水車

結婚式済めば襦衣(ウチカケ)どうする気

蹠蹠としてコーヒーマニア折れ曲り

打てば響くように西瓜は保証され

大阪市 市場没食子

テレて出す舌も美し十八九

三人目の孫生る

東京のうぶ声電話で知らして来

久しぶりに刈つた頭を冷やかされ

鳥取市 河村日満

愚痴愚痴愚痴「おじいさんに似てきたわ」

小ジヨツキ腹の虫まで生きかえり

部落対抗バレーにて

前衛に六尺豊か立たせられ

抜け通を観念させた将棋盤

電話では少し皮肉も言つて置き

親子孫へん屈なとこ似て困り

島根県 藤井明朗
加賀市 那谷光郎

うるさいと顔が言つてる眉を寄せ

国民不在の政治にはとほと飽きが来た

パチンコ玉転げて診察台にてれ

岡山市 江国幽谷

行く先があつて海月はゆれてゆれ

飛行機で日本の山の波を見る

ゴム印がねじれるほどに腹を立て

大阪市 石倉旅風

世の流れ下手な船頭の舟で揺れ

物識りの種を明かせば週刊誌

飲むほどに価値ある酔いの春の酒

兵庫県 河原みのる

冥土へのエスカレータか盆が来て

はとりより僧を迎える霊まつり

大阪府 中川滋雀

おおかたは笑うて事足るツンボにて

大掃除消費文化の捨てどころ

草臥れた扇子で停年らしい風

組合マーク応募作入選

賞金へペアツと飲もうとたかられる

大阪市 宮 地 双 楽

片肌が両肌ぬけて阿波おどり

幽霊になつて恨みを帳消しし

伝説も消えて蛇の淵ダムとなり

京都市 松 川 杜 的

襖絵の山の煙りになる蚊遣り

えんまそろそろ血圧を気にしだし

信心がまだまだ足らぬと鈴の音

大阪市 今 西 章 雅

大臣の答弁未来形で逃げ

すげかえて解散気配と批判され

五ツ玉僕の旧さにつきまとい

大阪市 村 山 光 輪

くず切りを食べて今年も盆詣り

親子だけわかる笑顔で発車ベル

夏枯れのお店が変り電話くる

岡山県 大 森 娛 句 楽

亡き夫のように似て踊る頬冠り

名優に納得のゆく貰い泣き

雰囲気と情緒で財布も軽うなり

小野田市 竹 本 素 空

メキシコをめざした気迫球をけり

蟬が逃げ野球の続きまたはじめ

陳情へいつもの検討してみます

出雲市 原 独 仙

避暑もない我が一族は夏に勝ち

そのドラマ俺の疵跡えぐるよう

結果から見た正直の阿呆らしく

大阪府 谷 沢 好 祐

海水パンツの跡だけ白い児を洗う

名神高速道路

ゆつくりも止りも出来ぬ不自由さ

田県・大県神社

別々に買うてお守り対となり

岡山県 池 田 古 心

釣り自慢釣れぬへ言訳こねまわし

何事も只何事もと押さえられ

早起きが自慢七十貧に耐え

松江市 柳 楽 鶴 丸

二十一世紀うらなう電子計算器

人は人私は私と割切れず

愛称へ笑顔で返事する課長

大阪市 宮尾 あい き

石切のせみ線香にむせて鳴く

半額の鈴虫鳴くまでうたがわれ

母の情炎娘等の涙でも消えず

玉野市 小 谷 仙 山

目的は海にも有った墓詣り

叩かれて西瓜の味が保証され

盆踊昔は月が丸かつた

倉吉市 奥 谷 弘 朗

前職の顔のきくのも二三年

花火よりビール目当の客が来る

坊さんが單車で走る盆が来た

兵庫県 大 江 秋 月

孫の顔見るのに十日間泊り

温度計お湯へ持つて来る子の化学

十円の値うちがあつた頃の寄付

高槻市 山 田 季 賛

口べたの後輩上役を握つとり

喰う余裕ない蚊が僕へ来てたかり

のんびりの長男を叱るまい叱るまい

鳥取県 渡 辺 乱 坊

浮き袋いやがる沖へ親は押し

夕涼み蚊に血を分けたので帰る

貫禄があるのはことビール腹

福岡県 太 田 湖 平

水屋が冷夏予想の逆で活き

裕着て案じた稲へ旱魃禍

三ちやんで野良の水さえ飲めぬ村

泉佐野市 大 工 睦 夫

阿波踊に思う

まごころを殿に誓つた阿波踊

阿波生れ盆にや皆んなに羨やまれ

美しさまじめさ競つて総踊り

姫路市 隠 岐 不 醉

食うだけで不寝番かと犬の愚痴

やり直し出来ない俺はもう六十

奈良県 草 深 醉 升

戦死者に今頃叙勲差別つけ

リンペンと間違えられて待ちぼうけ

新居浜市 近 藤 凡 生

春夏秋冬見栄と虚勢に生きて泣き

ねがうべき倅の道遠く流れ雲

富田林市 岩 田 み よ

どの顔も骨までやけたと夕涼み

簡単にへこたれるほど若くなし

大阪市

川口弘生

宮島は干潮で蟹に迎えられ

三階へんを土足で走る高速道路

岸和田市

葛城かつらぎ

黒い種子蒔きに朝顔今日ものび

肌に粟立てて冷房きかし過ぎ

加賀市

大山雅城

カナ屋号右から読ます古いこと

老木も稚木もおなじ桜花

小松市

馬場魚山

剃刀が顔のたるみへ引つかかり

扇風機の風台風が近い風

児島市

伊丹阿喜良

内職へ小さな夢があるはげみ

ゴシップが隣近所をせまくする

京都府

西村句楽坊

御仏も暑いだろうと厨司開く

禿頭へ冷水和尚の暑きはらい

加賀市

細呂木魯木

起きまつしまだかまだかと雀鳴き

原色と露出で目をひくなぎさ族

仏壇の中で父さん一等兵

和歌山市

土谷城石

身に合わぬ浴衣を平気で旅の夜

大阪市

佐藤甘草

月末の集金給料につきまとい

地植えやめはち植えにする合理化

和歌山市

二越俊爾

死の恐怖なしと説く入院し

どん底で人の心を知らされる

★

路郎師を偲びて

ひととせめぐり来て涙あらたなり

亡き人の移り香のこる土用干

責任は持つと認知もせず別れ

ころなきドラが港の恋をさき

腰巾着でした外遊とは仰言らず

清水白柳

虹渡るサイクリングを見送りぬ

スベアーとしての役目に甘んじる

夜空など見るとまなき恋はげし

川村好郎

サービス品というハムの薄いこと

妻の気の立つ日おはなはんを消し
約手落すだけで動いている工場
失恋に泣かない女をさげすみぬ
ぎりぎりのところで裸体でない水着

北川 春 巢

定年後新生にした味気なさ
或る時は妻の話が理にかない
3DK蠅取り紙がぶら下り
いい歳をしてと六十生き難し
女すぐひとの倅せきたがり

菊 沢 小 松 園

上衣着て上衣着ている人数え
電気時計も夏バテかみな狂い
幸福な女に見えるボンネット
健康法語る講師の太りよう
冷房完備の講演会で寝て来る気

西 尾 栞

堪え忍ぶことのみ多き世に生れ
墓地公園土地だけでもと思う齡
孝行も過ぎれば親の方疲れ
ほどほどに酒のむすべを子に教え
金魚さえきれいな方が先に売れ

中 島 生 々 庵

掃苔の一人は義理の中の人
掃苔や昔は若死やつたと話しつつ
それぞれにスポンサーがあり孫達者
夏休み指切り通り孫が来る
プラモデルませた言葉で手伝わし

若 本 多 久 志

人生中退友一人消え一人消え
天寿を全うし等と棺の釘の音
算盤が達者で老醜しよいきれず
死の前戯に似て老骨のすばらしさ
眠る食べるまだまだ遺書は早やすぎる

川 柳 塔 本 社 同 人 総 会 お 知 ら せ

十月九日（日）午後三時開会・会場・自安寺（南区千日前電停前）
（電話211・1478番）

当日は午後六時から同会場で創刊一周年記念句会を催します。

路郎賞受賞作品きまる

内職に

藤色がある

たのしさよ



内藤きさ子

作者略歴

昭和十六年、勤務先のF会社の川柳会にはいり、結婚のため一時は中止したが新聞紙上で岸和田川柳会を知り、その後「川柳雑誌」の同人となり今日に至る。
大正十年五月七日に生まれ、主婦業専門で家族は夫君と母の三人暮らしである。

「路郎賞」きまる

中島生々庵

私がこの一年間に選をして川柳塔に発表された約五千句の中から、七人の推せん者が十句宛えらび出し、その上その十句の中から秀句一句を推せんする。その結果をまとめて私が最優秀句を選考して「路郎賞」を贈呈しようというのである。

誌上では六月号に初めて発表されたが、その数カ月前から常任理事会で再三再四いろいろと検討されたのは勿論である。ことほど左様に大変な難事業であることの覚悟は初めて出来ていた。

七月十日の路郎忌と並んで私達の頭を埋めていたもので、従って推せん者として指名された七人の方々は毎月毎月の川柳塔にひそかに特殊の記号でチェックしながら、きびしい態度でのぞまれている。したがって選者としての私が毎月真剣な緊張を続けて来たことも当然であるといえ当然であろうが、人知れぬ苦しみがあったことも事実である。しかし今日こうしてペンを走らせていると、なんともすがすがしい気持ちで一ぱい。たどりつ

た峠の涼風を満喫している気持ちに似ている。七人の推せん者の感想も全く私と同様であろうと思う。(そして又来月から次の峠への道を歩きはじめるのである。)

さて私の手許に届けられた七十句の中から最優秀句ということになるのであるが全く経験のない役目であるのでここに発表するまでには極めて困難な、苦しい時間を長い間持った。勿論推せん者の推せん理由や感想を充分熟読した上で、各句に対する私なりの鑑賞をすすめたことは申すまでもない。

最優秀句

内職に藤色があるたのしさよ

内藤きさ子

批評みたいなのは、この際蛇足であるが梅志氏がいうように「庶民的でふくらした」句である。読んでいるとだんだん読者のものしくなる。実をいうと私自身はこの「内職の」句と前月の「かりそめの陽ざしにあらす猫柳」というのに恐ろしく惹かれていたことを白状する。「女性性は女性の句を」と云われているが、女性でないとい作れない句、男性が踏み込めない句境がきさ子氏にはきびしいまでに感じられる。

準優秀句

春に咲く花をわが手で咲かせた気
疲れてるまぶた閉じれば音がする

寺田 花宵

宮川 珠笑

ベスト10の味

清水 白柳

けちでよし気がよくてよし皆わが子
手品師の鳩飛んで行くところがなし
レール二本交ることを許されず
熊がおじきしていると人間が思うだけ
梅 文 志 秋
十九平

小さな見栄一番うしろからおりる
蚊帳の隅は故郷よりも晦く遠し
不きげんな靴だと自分でも思う
ひとりの家に帰り電灯みんなつける
右手使う仕事右手の冷える朝
古 一 三 夫
風 方
水 客
清 生
きさ子

疲れてるまぶた閉じれば音がする

宮川 珠 笑

川柳塔創刊号から第十二号(四十一年九月号)までの同人作品の中から一句だけ選ぶということは本当にむずかしいことであつた。一冊毎に選んだ句を書抜いてみると全部で五十九句になった。その五十九句の中には同一作家で四句の人が二人、三句の人が三人、二句の人が八人と一句が二十六人の合計三十六人ということになった。三句四句の人が出来たのは何か片寄った選び方になつたように思

えて考えさせられたのだが、しかしこれは当然のことなのだと思ひ直したのである。

句を選ぶときは、自分がこういうふうに表示したいと思つてゐる表現方法の句に氣をひかれるのは当然であるし、また詠みたいと思つてゐる境地を詠まれた句を見ると心を打たれるのも当然であらうと思ふ。だからさうした心境にある作家の句や、その作家の持つてゐる作風にひかれて、選ぶ句が片寄るということは止むを得ないことだと思ふ。

厳密に言つて、川柳というものの定義が、有つて無いようでもあるし無くて有るようでもある現在だから、恐らく公平無私な選句などというものは有り得ないのが本当だと思ふ。だから私は川柳塔同人の一員として、同人作品の中から、私の信念と経験とによつて最善の努力をつくして、この一句をえらんだのである。

各選者がそれぞれの信念から推される作品には、その理由があることだから、それによつてその選者の信念なり考え方があらわれるのだからたのしいことでもある。私の推せんするのは

疲れてるまぶた閉じれば音がする 珠 笑
である。推せん理由を書こう。先ず第一に句の純真さにひかれたのである。

うまいなと思ふ句、上手だなと思ふ句、奇麗だなと思ふ句は、どうしても、そこに作者の意識が出すぎているように感じられるのである。つまり個性というのだろうか、その作家でなければならぬという作家の個性は大

切なことは言うまでもないのだが、その個性と同時に川柳として持つていなければならぬものに共感性がある。個性的な作家の作品が持つその作家の体臭といったものが、この句には無いのだ。それだけにだれにでも共感が持てるのではないかと思つた。

「疲れてるまぶた閉じれば」ということまでは、だれにでも書けることなのだ。結びの文字が生きてゐるのだ。「音がする」というこれなのだ。理屈を言えば「どんな音がするの か」というかも知れない。現実には音がする筈がないのだ。が、作者はまぶたを閉じた時に音がする程の疲れを感じてゐたのだ。その疲れがどんなにその作者にとつて深いものであつたかを感じさせることが出来ればいいのである。体臭の淡い純真な句というゆえん



である。

第二の理由は作者の若さである。候補作品として選んだ十句の作者は同人の中でも選者として立派な人たちばかりであったが、その中でただ一人この句の作者は三十一才という若さなのであって、今後の川柳は矢張り昭和生れの作家にウエイトを置くべきではないかと思つたからでもある。

けちでよし気がよくてよし皆わが子 文秋
申し分のない句であるが余りにも普遍的な点が氣になつて推さなかつた。

手品師の鳩飛んで行くとこがなし 梅志
しつかりとつかんで居られるのだが、手品師という文字が氣になつた。奇術師ではいけないのだからかと思つたのである。

レール二本交ることを許されず 十九平
宿命というものに目をそそいでそのはかなさを詠いあげてあるが、かたい感じがした。

熊がおじぎしていると人間が思うだけ

一三夫

風刺に満ちた内容が、表現とびつたりマッチしてゐると思つた句であるが少し軽い感じがした。

小さな見栄一番うしろからおりる 古方
小さな見栄というのが、年令的にわかるのが年令の差で共感の度がどうだろうかと思つた。

蚊帳の隅は故郷よりも晦く遠し 薫風
作者の体臭を最も感じさせられたのだが、それだけにこの一句をといてわけにはいかなかった。

不きげんな靴だと自分でも思う 水客

秀句鑑賞にも採り上げられた句であるが、この作者としては重厚さが足りないのではないかと思つた。

ひとりの家に帰る電灯みんなつくる 清生
昭和生れの作家として瞩目しているのだが、川柳塔になつてから振舞ないのはさびしい。十七音字にこだわるわけではないが一句をといて右手使う仕事右手の冷える朝 きさ子
作者の感覺のよさにはいつも敬服している。この句も最後まで迷つたのだがやはり破調といふことで見送つたのである。

新しい常識

北川 春巢

「川柳塔」が昨年十月に創刊されてもう一年が過ぎました。早いものです。所がこの夏になつて、この「川柳塔」誌全同人作品の中から、最優秀句に対し「路郎賞」を贈呈するのでも、候補作品を選ぶように、その命令を受けました。一年間の雑誌を取り出して猛暑のさ中、一句一句を読み直した次第ですが、この期間の長かつたこと。一年の経つことの早かつたのに比べ、その句を読む間の長かつたこと、ご想像いただけると思います。

たこと、ご想像いただけると思います。ご承知の如く「川柳塔」には毎号、前月号からの「秀句鑑賞」が後藤梅志氏の麗筆で飾られております。何かの折に梅志氏から伺つたのですが、スベースの關係とはいへ、毎号十句位しか秀句が鑑賞できないのは残念であるとのことでした。秀句はもっと沢山あるという意味です。それにも拘らず、私に命ぜられたのは、一年間の総ての句の中から十句だけを選ぶということです。これはほとんど人間業ではできそうもない至難なことであります。そこで私は編集部からの命令に背き、一号一句、計十二句を選びました。名句が揃つていて、あれもこれも取りたい号もあり、皆さんがスランプなのか、出来るよくない句が並んでいる号もあり、多少の不公平は免れないとは思いましたが、そうでもしなければこの至難な業はでき得ないと思つたからです。

故路郎先生は「川柳は人間陶冶の詩」とあるといわれ、「いのちある句を創れ」と号令されました。詩といえはまた色々と議論があると思ひます。故長崎柳秀先生からは「川柳は常識である」と教わりました。常識は時代により多少の変遷があります。変遷により後世意味が分からなくなつて「いのちある句」でなくなる場合もありましよう。しかし私は柳秀先生の教えに従つて「新しい常識」の句を選ばせて頂きました。生々庵主幹にも、白柳編集部長にも、また多くの読者諸賢にもご了承頂きたいと思ひます。

最後に、どれだけの句を見たかを計算してみます。これは候補者選者の方々全部が見ておられる筈ですが、記録を取っておられるかどうか分りませんので、参考のために書き加える次第です。括弧内は梅志氏が鑑賞された秀句の数であります。

十月創刊号、三五七（一〇）、十一月号、二九二（一〇）、十二月号、三五二（一〇）
一月号、四一八（二〇）、二月号、四六六（一〇）、三月号、三六三（九）、四月号、四一四（二二）、五月号、三七九（九）、六月号、三八五（九）七月号、四二九（八）八月号、四四七（一〇）九月号、四八八、総計四、八〇〇句になります。梅志氏の秀句鑑賞の句数は、選者の自選句並びに近作欄の句を差引きました。計一〇七句であります。（九月号のぶんはまだ発表になっていませんので、これはいっていません）

それでは最後に、私の推選する候補賞の秀句をお目にかけることにします。順番は創刊号から本年九月号までの順です。編集部からは句に説明をつけておくように、との命令でありましたが、私は特に説明やら註釈はつけませんでした。「常識」の句ですから、読者の皆さままで味わって頂ければ幸いと思います

キャンブの荷だけは重たくない若さ 雄々
恋人の上衣幸福そうに持ち 珠笑
小さな倅せ子と球根を植える 紅月
単身赴任生理出張許される 方大
オルガンは妻のへそくり作る音 弘朗

しあわせは鞍上の人信じきり 古方
眼帯をはずして零を読みおし 宗太郎
ストライクだわとお見合帰って来 きさ子
春に咲く花をわが手で咲かせた気 花宵
パチンコの釘ほど守る子の野球 一乃字
読みかけの本ばかりなり老いたるか 梅志
両替にたばこを買って下さった 無鬼

予選を終えて

若本多久志

毎年七月の路郎忌と共に、十月に、路郎賞作品の発表という事業は、川柳塔社の存続する限り行われるわけであるが、さてその候補作品予選の一端を承った私として、実に責任の重大さと、自分の非力を痛感させられた次第である。

しかしこれが亡き路郎先生へのご恩返しであり、先生の提唱された「命ある句を創れ」の精神に徹する道である、奮起しようやくこの大きなお役を全うした。

したがって選句に当っては、かねて路郎先生が教えられた「川柳には人生がなければならぬ」ということを主眼としたつもりである。

総句数四二〇八句、先ずこの中から一句を

選び、更にこれを四一句にしぼり、最後に珠玉の十句を推選した。勿論、各作品には番号をつけて句主を明らかにせず選句したものである。

母の文鉛筆なめたところわかり（12月号） 越智 一水

遠く離れた故郷の母親から、為替に添えて来た手紙を読んでいると、うす暗い電灯の下で、鉛筆をなめながら書かれたであろう一字一字に、おふくろの暖い愛情が滲んでいて、胸がジーンとするものである。

社長室友は昔の友ならず（1月号） 工藤 甲吉

ふるい友達が苦勞の末、どうやら会社らしい会社の社長になったので、一度訪ねてみよう

色紙短冊
書画用品

大坂戎兵

丹精堂

中野セニ、セニ

うと社長室にはいれば、友は昔の友ならず、「金でも借りて来たのか」と云わんばかりの態度には友情どころか、人間味のカケラさえも見えなかったという、寂しさを詠んでいる流人島矮い墓みな海を向き(1月号)

早川 清生

幾歳か赦免の日を待ちわびながら死んでいった流人達の心根を哀れんだ島民達が、せめてその墓を、本土はるかに望む丘の上や海辺に、海の方に向けて建ててやったのだという小さい墓の群を見た時、誰しも胸が締めつけられるようなおもいがする

我女愚痴の多きをさとりつつ(2月号)

中島 小石

禪の教えに「常に足ることを知る者は富貴なり」という言葉があるが、凡俗にはなかなか到達出来難い境地である。まして女人は、瞋恚の念深く、愚痴が多い。この句主はこれを「悟りつつ」悟り切れない人間の苦しみを喩みしめているようである。

ありふれた人が悟りをひらいてた(2月号)

吉田圭井堂

「悟り終れば末悟に同じ」という仏語があるが、ほんとうの悟りとは、悟りのくさ味もない—美人を見れば美しいと思ひ、食いたくなれば食ひ、寝たくなればゴロリと寝る、自在の日常じや、と曹洞宗の高階管長に教えられたことがあるが、この句主もそうした境地を詠んだものであらう。

父の籍母へ時々会いにゆき(2月号)

杉原 愛鳩

父と母とが別れなければならなかった理由は、どんなに理解しようとしても解らない。然し、父への愛情、母への愛情はその形こそ違え、暖く深くそして、糸のように長い絆となつてゐる。この句はそうした愛別離苦の悲しみを、いみじくも十七文字に強く表現している。

猫といつしよに大屋根で寝てみたし(5月号)

小川静観堂

一年三百六十五日、なんとセカセカとあわただしい人間の生活であらう。手帳にギョッリつまつた日程表を見ると、果してこれだけのかという反省の前に自己嫌悪さえ覚えるこんな時、ふと見上げた屋根の上に、春の陽をあびて、何の屈託もなげにうつらうつら眠っている猫、—ああ俺もあの猫のようにとユーモアの中に鋭い人生観が詠まれている。

手をなめた犬を迷わず買うときめ(7月号)

寺田 花宵

人間性の弱点をついた句はたくさんあるがこの着想を大いに推賞したい。しかも何げない表現の中に鋭い実感を覚え深く考えさせる句である。

ほのぼのと女の謎がいまわかり(9月号)

浜田久米雄

石部堅吉さんと云われるような男は勿論のこと、一通りの女道楽を仕了したという男でも、女心の謎はなかなか解きかたいもので、相当の年輩になり、いわゆる、甘いも酔いも噛みわけた頃に、ようやく、今までの経験上にあらわれた女の謎がわかりかけてくるもの

である。

こうした「女の謎」であるから、「ほのぼの」がよく利いて、この句の命になつてゐる父の日の父後悔があるばかり(10月号)

奴田原紅雨

子供達が父親の労苦に感謝する日として、定められたのが父の日である。しかしこの父親はこの日を、反省の日として、ただ生んで育てたという以外に、何の与えるものとなつた自分の不甲斐なさを、心深く詫びると共に、この父親を瀕死に、乗り越えて、人の世の荒波に立ち向かして、祈り念じている愛情を吐露している。

新人を

推したかったが

西尾 栞

路郎賞という言葉と意味について、最初いろいろ意見があったが、最後に、たとえば直木賞、芥川賞のようなものだという事で、けりがついた。これを自分なりに解釈すると路郎賞は、川柳塔の、登龍門ということになるから、川柳塔社の同人ばかりでなく、近作柳柳の一般投句をも含めて、選ぶべきが至当だと思つたが、今回は既に、発表のとおり同人作品中より選ぶことになった。

同人作品の中からでも、比較的新人の句を選ばねば、然らぬという考えから、選に選を、重ねていったのだが、結局最後の推薦句は、作品という重要性から、遂に選者級の句を選ばざるを得なかった。他の九句については、やはりキャリアがものいうベテランの句を、最初マークしたが、兄たりがたく弟たりがたき句の場合には、柳歴の新しい人の句をいただいた。

なお句評を添えるよう言われたが、十句中の一句に「批評家は鮎を崩して食う如し」という句があるように、せつかくの名句、佳句を分解することは、蛇足これに過ぎずと思つたので、最後の推薦句にだけ文字どおりの蛇足を加えたことをご承知いただきたい。

本当を言うのに一晩中迷い
要領の悪さに徹し文化財
妻はもうつかず離れず趣味に生き
批評家は鮎を崩して食う如し
汚職まで被り給わぬ起工式
納骨の順に割り込む人があり
たあいまい心晴れたりくもつたり
三面鏡なんでもなかった顔にする
雑談になつてから出たい意見

仙山
どんたく
酔夢
旅風
みゆる
珠笑
奈良子
紅雨
たつみ

推薦句

内職に藤色があるたのしさよ

きさ子

すでにこの句は、後藤梅志氏の秀句鑑賞で充分言いつくされていと思ひますが、詩情が、ユーモアが、この一句の中に、すっかりとけこんでいるのであります。

この句には、内職という言葉からくる暗さが全然ありません、藤色と言う色に対する色彩については、造詣深い梅志氏評でつきいてなりません。黄でも、赤でも、白でもいいませんが、藤色は動かない色であります。下五のたのしさと言う語はいささか説明的なようでありますが、内職が次々とはかどつていくたのしさ、それにとまなう賃銀のたのしさ、暗い狭い内職部屋が、藤色で一種の装飾のようになつていくたのしさ、を言っているのです。この場合、嬉しさもいなければ、どんな言葉もあてはまりません。やはり平仮名のたのしさでなければなりません。もって推薦の言葉といえます。

なおこの句と最後の最後まで、競争した句は、薫風氏の「福寿草父子兄弟似たりけり」の一句でありました事を、附記して置きます

私好みの句

川村好郎

中島生々庵選によつてすでに発表された五千句の「川柳塔」から先ず五十四句を選ぶことも容易ではなかつた。しかしさらにその中から規定の十句を抜き出すことには身も心も

すりへらす思いであつた。まずできるだけ古豪作家の句を心を鬼にして捨てた。それでも十句にならず、やむを得ず私好みの句をやつと選ぶことにした。

見晴らしがよければよいで風当り
公益が増えれば増えたで公害が又増える。
住みにくいかな人の世は。

吉田圭井堂
本多 柳志

国訛り失意の耳にあたかし
うまいという一語がこの作家の句にいつも

感ずる。この句もその一つ。
恩師の死其の夜眠むしも眠し 橘高 薫風

路郎師の逝去を詠んだ句はたくさんあつたが、さすが師を敬慕し、影に添うように接

しられたこの作家にして詠める句として推す。

くされ縁ですとゆかたもお揃いで

内藤きさ子

倦怠期もやつと越した夫婦の心情を突いた句として、この作家の多くの佳句の中で私

好みの句として選んだ。
まつすぐに歩いていてもよく曲り

浜田久米雄

平凡な句にみえて、鋭いものを持っている「心だに真の道にかなないなば……」と誰が

言い切ることが出来よう。真とは最大の努力プラス、アルファである。まだ足らぬ。

この反省だ。

憎みつ従いつ女のごうかしら 岩田 美代

理窟だけでは何事もゆかぬ。ことに男女関係においては。巧みに女の弱さ、情の細ま

やかさを詠んでいる。

娘三人みな惚れられて嫁っちまい

不二田一三夫

娘ばかりの父親の心情をよく表現されている。「みな惚れられて」とうれしがり、そして「嫁っちまい」と寂しさを感じている

嫁にやるように竣工引渡し 仲 どんたく

工事を請負うて立派に竣工し、施主に引渡した経験があり、やっと成人した我が娘を嫁にやった親でなければ詠めない句である。比喩法の川柳として拔群である。

悠々と地下街すかたん歩いてた 傍島 静馬

この作家の独壇場の句である。現在の大会をとらえ、誰でもが経験する一コマを巧みにキヤッチしている。人生という地下街に案内悠々としてすかたん歩いていないだろうか。ユーモアとだけですませないものがある。

推選句

春に咲く花をわが手で咲かせた気 寺田花宵

成功すれば我が力が大きく感じられ、失敗すれば運が悪い、家相が鬼門だ、姓名が悪い、政治がわるいと逃げろ。そのくせ、他人が成功すれば運のいいやつだ、失敗すれば努力が足らぬなどと言う。生かされて生き、生きることによって生かされてゆく。

これが人生でなかるうか。この人生観を女性として春に咲く花を見て理窟つばくならず美しく、軟かく詠んでいる。美しく咲かせた誇らしげな顔が見えるようで、それを第三者が批判して反省しているのである。

この一句

松江 梅里

佳作

国訛り失意の耳にあたたかし 本多 柳志

ひたむきな恋は香車のその如く 工藤 甲吉
看護婦が女に見えるほどに癒え 小林 孝正
忙しいやないかと税務署ほめてくれ 傍島 静馬

枯れてなおあざみのトゲは人を刺す 内藤ささ子

愛してて妬いておこらすのも無盾

コマシヤルうるさがられておぼえられ 川岡霊眼子

親こころ子の足音を耳で追い 安平次弘道
継ぎ継ぎの小包の紐も有難く 本田恵二朗
小西 無鬼

この子等が居てどん底に明日がある 岡田 彰男

これと全く同想の句が九月号に掲載されていたが、五月号のこの句を探ることにした。

私の句に、「どん底で生きる歓喜を呼びおこし」「遺児五人抱えいばらの途を抜け」

これはいずれもモデル句であるがこの二句

をうまく一句にまとめあげた傑作である。敢えて私はこの句を推選することにした。

戦病兵として帰還した私の友人がまだ戦争がいつまで続くかも知れないその年の五月、大阪日赤病院に転送され八月十五日の詔勅を聞いたその夜、病状急変ついに奥さん二十六歳を頭に五人の子をのこして戦病死した。会社の課長級ではあったが大した遺産もなく、いくらかの有価証券を手離しては食べ盛りの子等五人の糊を過していた。奥さんの不安はまったく気の毒という言葉の表現では足りない状態であった。

座して食らえば山をも空しく忽ち唯一の株券も残り少なくなった頃、長女に弟妹達の面倒を見させあの混沌とした敗戦後の大阪でまだ三十九才の若さで敢然とみずからかつぎ屋となり、食糧難に体当たりしてあらゆる物資の買出しに、夜に日にかけて働きとおした。

当時新聞紙上に和歌山県下で検挙の眼を逃れるために鉤の買出しにねねこの中にもぶりを背負い、ぶりの頭に正ちゃん帽子をかぶせて免れる手を考えたのはこの奥さんであった。それを真似た人が遂に検挙されたということもあった。まったくのどん底にあざぎつけて血のにじむような苦斗の二十年。この子らのために明日の希望を捨てなかった母。老いたり云えどもまだ六十。すくすくと育った五人の子ら、いまは立派に成人してそれぞれ貰うべきものは貰い、嫁ぐべきは嫁ぎ、月々どの子らの家庭からも先きを争うて母を迎えに来る。

現在末つ子の四男がいつも引取って離さないのを二男三男が迎えにくる、長男がじっとしておれぬ、娘の婿が割り込んでくる、実に嬉しい悲鳴をあげている母のようこび。こんな涙ぐましい模範的な家庭はおそらく見聞したことはない。世の親をじやまもの扱いにしている不心得な人たちに爪の垢でも煎じて飲ましてやりたいと思う。

路郎賞

候補 10 句

菊沢小松園

① 枯れてなおあさみのトゲは人を刺す

② 鮎はねた時の姿で焼かれて出

③ 姿態人間むこいものを喰い

④ 頭うつ雲雀は籠に慣れていず

⑤ つつましく生きてても女唄され

⑥ 嫁きもせず困われもせず三味に生

⑦ 芸はそも鬼か女房泣かされる

⑧ み仏けに仕える身とて銭は銭

⑨ 御臨終不幸にも金があり過ぎる

⑩ 珍客を奥へ通して内輪揉め

⑪ 珍客を奥へ通して内輪揉め

⑫ 珍客を奥へ通して内輪揉め

内藤きさ子

若柳 潮花

吉原 紅月

山川 阿茶

藤井 明朗

山井 明

若柳 潮花

後藤 梅志

吉田圭井堂

福井野迷路

服部十九平

服部十九平

服部十九平

に氣にいらぬ内容があったのであろう。愛情の葛藤か、金銭のもつれか、客室へ案内してから内輪がもめる、面白い掴みどころだが句柄としてはやや小さい。

⑨ 人生に於ける最も真面目な場面だが、不幸にもありあまる財産は、あっさり息も引き取れない、笑えないナンセンス、川柳の持つ、ユーモアもあり、風刺もきいてる、しかしこうした臨終というような句は、損なうのである。

⑩ 一心に仏門に仕える御上人でも、現世の凡悩との、交渉を断ち切ることは得まい、さらに事金銭に関することはなおさら別だ、人間の心理をえがいてあますところなし、ただし句の想やや浅いようにおもわれる。

⑪ 句主の詠みそうな境地、事実、芸道一すじ名人のかけに泣かされる、妻の姿をえがいてあますところなし、この場合、女房の語がピツタリ生かされている。年配向きの句で渋いが、一般向きでないのが難か。

⑫ 女の句に、独得なうまみを持っている句主の他の追隨を許さぬ佳句、女心の不可思議さをまともあげて一つの性格までも、えがきあげたと、凡手でないとおもう。がこの句も又句材の消極的なのが損なう。

⑬ この若く美しい、未亡人が生きるには、余りにも、世間は好奇心がありすぎる、そのつつましやかさも、うわさの種になる。上品な構成が、いふし銀のように光っている、だが句材の持つ弱さが損な立場にあると云える。

⑭ 川柳の持つ軽味のサンブルを示したような

句、人間の生活にも、時々こうした場合を見る、軽いスケッチふう仕立て成功している

⑮ 人間の独善ぶりや、ワンマン振りや、勝手気ままぶりを、すしのおどりを借りて、人間そのものを衝いたところ、なかなか、凡手ではない。

⑯ この作者の句は総体に句語の美しさと絵画的な句の構成で色彩感をはつきりさせて、一幅のカラー写真を見るように出来ている、鮎のはねた姿、そのもの、一番はなやかな姿で死んで行く、暗さのない、死は美しい。

⑰ この句を推した理由の一つに、時間的な経過を見ることが出来るからである、上五枯れてなお、盛んだった頃は云わずもがな、枯れてもお、である。短詩型においては時間的な経過はむずかしいとされている。それが、無理をしないかたちで、いとも自然に詠まれている。鮮烈な夏の太陽を思わす、薔、色に誘われて、知らずに手を出せば、棘がある、しかも枯れてなお人を刺すと云うのである。

⑱ こうも行き届いた、用意された、叙事法でぐんぐん心をとらえて放さない。近頃少なくなったと云われる、パンチの利いた句として第一席に推すに躊躇しないものである。

★受賞者に記念品贈呈

路郎賞受賞者には句と雅号をきざんだ記念品と表彰状を贈呈することになっています。それから準優秀句二氏にも賞状と記念品が贈られます。その栄光の日は十月九日です。

無題

山上千太郎

古稀を迎えると、これから後の年がかわた
だしく感じられる。身辺を清くしておきたい
といった深い考えがあるわけでもないが、余
暇あるまに、古い切り抜き帳や、書き古し
ものなどあれこれ整理しているうちに、目に
止まったものがある。当地の川柳大会を報じ
た新聞切抜きである。これに橋本緑雨さんの
名前が載っているから珍らしい。だが、うか
つにも、記入を怠ったので何年頃のものと解
らない。裏面の記事などから推察すると昭和
六年頃と推定される。緑雨さんが詳しく記憶
されているかも知れません。

さて、この切抜きは、第七回金沢川柳大会
を、三回に渡ってかなりの記事を写真入りで
載せている。残念ながらこの写真からは緑雨
さんを識別出来ない。原文の一部を紹介する
と――第七回金沢川柳大会は春酣わの四月廿
日、新装の仙石町教育会館で開かれた、金沢
の川柳家は勿論遠く大阪より川柳雑誌社の橋
本緑雨氏来り県下では小松芦城川柳の同人諸
氏を初め各地川柳社の諸君馳せ参じ近來にな
い盛会であった、……と型通りの書き出しで
報じている。川雑社から緑雨氏お一人が見え
られたがお連れがあったかはわからない。小

松芦城社からは私ら九人ばかりが参加してい
る。県下八社はかりの代表者など五、六十名
の集会のようだった。現県下の諸指導級の名
前の見当たらないところからこの会の年代の古
さが察せられる。

ところで、この日の「五席題」を個人選と
して五人の選者が受け持ち、「一兼題」を五
人の共選としているのもおもしろい。五人の
共選は各社の代表が当っている、小松井々楼
羽咋句三昧、粟ノ保せいか、石川宮保一俵子
金沢冬青、の諸君である。

さて、第一席題「別れ」の選者窪田銀波楼
氏は北国新聞の学芸部長として県下柳界の発
展につくされたがすでに故人となられた。

第二席題「米国」の選者安川久流美氏と、
路郎さんとの親交は誰れにもよく知られてい
たが、両先生とも今やこの世に居られぬ。

第三席題「狂」選の酒井雅楽頭氏は、当時
の華街の春の踊りの作詩家として、又奇人と
して話題多い人だったが、これも早くに亡く
なっている。

第四席題「女給」選者橋本緑雨氏は今なお
健在だが、近年健康を損ねて居られるとか、
心から御自愛をお祈りします。

第五席題「手拭」山上兎月選（現千太郎）
こうして三十余年の年月は永く厳しい。この
日顔を合せた多くの柳人の、その大半が、故
人となり又柳界から遠のいて行った。いまこ
の句会入選句から今も柳界現役の近身の名を
挙げて見ても五指に余らない。寂しくも、も
の哀しい。

◇

金の貸し手もなし米国も行けぬ
喰ふ事の外は狂人唄って
手拭の匂ひを姉はかき別ける
午前二時別れ話へ酌ぎこぼし
狂暴の性質女教師持て余し
手拭の汚れも父の疲れすぎ

（註 伊藤茶仏氏の旧号）

道連れと別れ煙草を吸ひつける
尖端を行くに米国苦心をし
蒸したオル床屋加減を顔へあて

（註 ふあうすと同入越中今雨氏）

淋しく別れば柳に風があり
狂人の口に金齒
罪の顔をかくす手拭ともなりぬ

（註 金沢、森下冬青氏）

雲焼けて母と別れた日を想ひ
日本の桜を植えて禁酒国
病弱に生れて歌にだけの恋

（註 筆者千太郎旧号）

右五氏のうち三人までが川柳塔社に籍をお
くとは川柳塔も大したものだ、当時の緑雨氏
の活躍がしのばれる。

緑雨 思介楼 今雨 冬青 兎月

痴盲録 (2)



鈍 亜 鷺 高

いよいよ私は、路郎先生の忘恩の徒となつてしまった。先生の一周忌にも出られなかった。

高鷺鈍という川柳名は、先生を知って、「川柳雑誌」に発表する時だけに使つたものであり、その名づけ親は先生と云つても良いからである。そして二十年近く「川柳雑誌」以外には発表しなかった私が、終戦後間もなく、目を患つて隻眼となり原稿が鈍つてき

近 詠

麻 生 葭 乃

猫きちがいが猫に使われ又たのし
おかげ話へうなずくとしとなりディエンド
恩情の中のからくり知るも憂し
秋は来ぬ花屋しきみを外へ積み
供え花桔梗がまじり盆に入る

て、先生並びに「川柳雑誌」に御無沙汰するようになった。それと私の私生活上の問題で、先生と感情のもつれが生じたことから、どつと他柳誌に亜鈍で発表するようになった。「川柳雑誌」の関係者が他柳誌に原稿を売る等は、その善悪を早急に決める可きではないと私は思うが、いずれにしても、先生の忌憚に触れることになったことには間違いない。全く不心得千万な当時の亜鈍であった。しかしそれも尾道へ去る前頃は、先生と私との間は氷解し、私の立場を私的に、又、私の川柳観についても了解されていたのは幸いだと思う。

迷いつつ疑いつつも手を合わし
六十で盲しきりと母おもう
ゆめでみる人は不思議に死んだ人
焦つてもどうにもならぬ義理を欠き
白い杖板塀叩いて路次をでる
黒い眼鏡外して吠える犬をさけ
宙返えりしても目の玉まわらない
手に職をもたずじまいのめくらでね
海底のベッドで昼夜のない氷魚
読める日があるのか新聞ためにおく
雑音の消えた深夜に杖をつき
光のとどこかぬとこに石一つ
虫も人も同じいのちをくりかえし

川傍柳 初篇研究

(四十)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義故 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

423 警女の色口跡のよひ男也 門柳

川端「『警女』は、盲で三味線を弾いて乞食して歩く女芸人で、売淫したものである。川柳では多少の蓄財はあつても男の色仕掛けにだまされて吐き出している。相手が盲なので言い寄った男が「俺もいい男だよ」と盛んに自分を売り込み、警女は目の見えない恐しさに、いい男と信じている。「おれもよい男とごぜを口説くなり」(四33)という句がある。

高須「目の見えぬ相手に、よく思われるためには、音声がよく言葉が上手でなければならぬ。その二つを「こうせきのよい」といったのであらう。

清「賛。その口跡が「金持の声色でござくどかれる」(末二ア)という場合もあるから、ごぜも油断できない。

藤井「『口跡がよい』とは普通役者の発声や声色につかわれるから、この色男一寸

気どつて当世流行の二枚目気取りの声の持主ではなからうか。

丸「賛。目が見えぬのだから顔はどうでも物言いのよいのに惚れこんでいる。「口跡」は芝居からきたことばであるが、相当一般化されていたようである。

岡田「賛。但しゴゼは盲女のことだが乞食をして歩くのでなく、また、売淫をしたのでもなく、音曲などを習い、芸人として身をたてていたのが多かった。良家や、江戸城大奥あたりにまで招かれて出入りしている。

424 鯉をおろしてそうじゆつ 蒼求をたいて居る 梅斧

川端「正月の長雨に鯉のぼりをおろして湿気を払うための藻草をたいている。

高須「賛。「五月雨」の語もある如く、当時は五月に雨が多かったらしい。

清「賛。五月に雨が多かったのは陰暦の五月で、今の入梅にあたる。

丸・岡田「同。蒼求は「和漢三才図会」に山蘇・仙木・山精などの別名を挙げ「処々山中ニ之レ有り。茅山嵩山ノモノヲ佳トス」などとある。これの乾干したのを焚くと、湿気を払う効能があった。

425 岡釣を寺の男が叱つて居る 五扇

川端「『岡釣』は太鼓持ちなどが客を待ちぶせることで、所もあらうに寺の近所をうろつているのを、寺男が見つけて叱っている。この寺の坊主実はいちよいちよい医者に化けて遊所に通っている。

高須「前の「卵塔」の句の類句と柳雨翁はいっているが、どうもその方が正解らしい。向島・鐘ヶ淵あたりの寺ではないか？丸「礎稿の野太鼓の岡釣りでなく、高須説が可。それにしてもつまらぬ句。

岡田「同。場所の限定がないと全くつまらぬ句。

426 さてこそと遺手のさわぐから寝床 眠床 狐

川端||遊女脱様の句。しずかすぎておかしいと覗いてみると、寢床はもぬけのからさては申し合せての駆けおちと、さわぎでしたのである。

高須||「さてこそ」だから多少予感があったのだが、カラの寢床を見て、「やつぱり」と大さわぎになった。

前田||さてこそは要を得ている。

清||賛。「から寢床事だ事だと遣手いひ」(玉8)「詮義しろ文でもあろうと逃げたあと」(拾七16)

丸・岡田||諸説に尽く。

427 光陰矢のとし嫁もふ縁が切れ 単 弓

川端||松ヶ岡に逃げ込んだではや三年を経て縁が切れた。「光陰矢のとし」は文句取りで「如し」と「年」をかけたもの。

高須||典型的な松ヶ岡の句。

藤井||「矢のとし」と書いているが「ごとし」の誤記で別に年をかけたものではあるまい。

丸||賛。「光陰矢の如し」の成句を採用しただけ。

岡田||同。

428 ふんどしのはづしちんが金三両 泉河

川端||初会・裏・馴染と三会目によゆく吉原では遊女は帯を解く。それを男の側から見ると、褌をはずすまでに三両も必要である。

前田||賛。褌のはずし賃は具体的で含みがあり面白い。

岡崎||三会目には三分の女郎を買えば遣り手に一分、床花に二両、しめて三両。

清||三会目を詠んだ句には違いないが、正確には床花を詠んだ句。「わづかない紐を解くのに二両置き」(一八3)「三会目国府の下へ二両置き」(五5)「いはず語らず引出へ二両入れ」(五一3)など柳句では、床花は二両が多いが、山東京伝の「傾城買四十八手」には「まづ三会めの客をつとめ、もはや床花の三両もしめてきたゆへ大の平気なり」など、洒落本では三両が多い。

丸||諸説につく。

岡田||三両は初会、裏をふくめた代金でなく、やはり三会目において必要とする代金であろう。もちろん三両で、三会目を暗示した句作である。なお当時は、女郎の湯文字をフンドシと称したことを一言しておく。登楼三会目には、いわゆる下紐を解くというコトバの通り、大サービスをした。

429 花の留守下女がぬき捨遣ひ歩行 泉河

川端||「花の留守」は花見に出かけた後の留守で、家中皆花見に出かけた留守番の色好みの下女の姦通である。下女は相模女が多く、相模女は川柳の場合色好みとされている。

高須||「脱ぎ捨て」だから、家へ脱いで

行った普段着で、それに「花見風」がいたろうという句。花見達がゾロゾロ歩いている頃、家では花見風が這い歩いたろう……で花見頃は、丁度シラミのわく時期である。

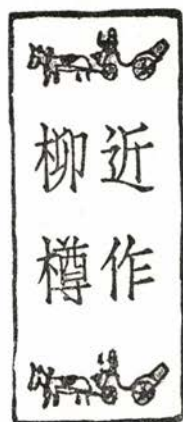
前田||「花の留守」であるから、一応姦通を感じるが、一家をあげての下女も参加したととる。従って風説が面白い。「花の留守のこざまはへとかたづける」(九25)

岡崎||シラミ説が面白い。だがシラミは人肌のぬくもりで這い回るが、脱ぎ捨てて体温のなくなった衣服では這い廻らない。縫い目に頭を突っ込んでひそんでいるだけだ……。

藤井||「這いあるく」は下女でなく風の方だと思うから、高須説に賛。それに「花見風」という風流な言葉もある当時だから。風は人血を吸わないと三日はもたず死滅します。発疹チブスワクチン研究のため駒込の伝研の先生が毎日一回自分の腕で吸血して大切に飼育して居られました。風は他の動物の血ではどうしても飼育できないそうです。寄主の居なくなった風が、人血を求めて這いあるくのではないか。

丸||高須説賛。川柳の例の下女を椰喻した誇張表現。

岡田||同。春暖の候だから、脱ぎすてた下女の着物から、シラミも外出(?)するのである。



松江梅里選

笠岡市 木 山 要 次

伸びるだけ伸びてみみずの大急ぎ

気心が知れて二階を呼んで食べ

俸せがあんまり続く恐怖感

云いつけた通りの妻で物足らず

玄関の犬の視線に負けて佇ち

よう我慢するねと妻をたきつける

倉敷市 水 粉 千 翁

山脈は青く理想のひびくとこ

月青く雲無く風の音を聞く

気が晴れるならと覚悟のかしこまり

日帰りの旅の余裕を子に貰い

愚痴ひとつふたつは欲しい親思い

セールの折目を付けてベルを押し

大阪市 吾 郷 玲 人

阿波踊り観覧席に居る阿呆

掃除しているのではない探しもの

沈む陽へひまわりお辞儀できようなら

底のない酒に飲み屋も慌て出し

色も香も失せし女に金があり

和歌山市 秋 月 宏 方

まだ知らぬものの一つに膝枕

カップルで行く一泊をうらやまれ

子を叱ることからママの朝となり

おじいさんされどまだまだ働く身

年中無休それは葬式屋の話

玉島市 井 上 旭 峯

インタビュウるさいほどに聞きただし

言いつけた通り急用迎えに来

嘘言えぬ性質で出世は口にせず

糧となる詩に孤独が支えられ

大阪市 小 谷 葉 子

京の宿亡母の香りのゆばの膳

三味の音が一層私を孤独にし

夏バテを防げと梅酒と母が来る

逢うててもやはり別れる人と知り

島根県 堀 江 正 朗

夫婦とはいいいもののそばに居るだけで

見えぬからすまぬと思う無理もいい

町内のふところ順に奉賀帳

趣味多忙今度は石を磨きだし

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

人生意気に感ずと調子にのり

女房の顔なら金を貸すという

人間らしく暮せと電気器具に言われ

サラリーの低い方から出勤し

倉敷市 水 谷 水

顔を見てやりたい親を教えられ

はぐれかけたのが大阪をほめちぎり

小理屈を言うてるうちが花にされ

動物園に務めぶつきらぼうでいる

西宮市 前 田 美己代

感情とは別な涙の武器をもち

抵抗の背なに決意をうながされ

太陽に挑戦ぎりぎりの線を出し

砂浜に素足の底をくすぐられ

羽曳野市 谷 垣 史 好

プールサイドすがすがしきは九月の陽

天理にて(三句)

異邦人のように背広が目立つ町

ひのきしん俺の靴まで拭いてくれ

縁なき衆生清めたまえと雨が降り

島根県 堀 江 芳 子

テキパキの気性恐妻だといわれ

夕顔へ浴衣の似合うひとが佇ち

ちぐはぐな返事夫は何思う

大阪市 江 城 功 雄

コンパクト忘れぬ妻の齡想う

無為徒食ふんぎりつかぬ朝を出る

裏切らぬ友の瞳は澄んでいた

大阪市 小 東 琴 女

もみくちやに捨てた馬券を踏みにしり

へそくりは架空名義にして預け

表向きは兄さんというヒモがおり

京都府 菊 沢 破 天

夕立を知る風鈴へ竿も入れ
借金に追れる足は早くなり
お百度を素足で祈る命乞い

大阪府 西 本 保 夫

酒おろかジューズも飲まずパパ帰る
とやかくと出世を云わぬ妻が好き
どんな手段を使うのかラツシユ席をとり

愛知県 横 紫 光

十九時にすれば隣はもうカラー
下請けの弱身は寄附も断れず
社の稲荷賽銭箱もチャンと置き

千葉県 鳥 飼 春 泥

おしつこの言えぬこどものよくしやべり
頬被りどれが姉やら妹やら
のし袋中身の空らを言いそびれ

米子市 八 木 千 代

煮え切らぬ声に扇子の音も焦れ
湯上りの匂い包むも惜しまれる
気兼ねさせまいとサーピスをして疲れ

大阪府 和 田 痴 亭

大物はもぐつて小吏は誠にされ
中年の魅力後退脂肪過多
民主々義意見をだせば睨まれる

大阪府 石 田 正 義

悟りたり死ぬも眠るも同じこと
討論し煮えくり返る帰り道
祭の夜夫婦げんかも華やかに

下関市 志 賀 木 石

もう誰も叱つてくれぬ年齢になり
泣くよりはましと前おきして唄い
昼風呂のたつた一人へ湯があふれ

桜井市 岩 本 雀 踊 子

生きて行くむつかしさを知る米をとき
英語がわかりまんのか奈良の鹿
生意気をわびて話に口を出し

松江市 岡 崎 祥 月

子のために働く意欲ペタル踏む
筆不精とは口実のたわごとさ
美しい夕陽湖水を派手にする

愛媛県 豊 島 二 九 三

文鎮のような女でいとおしく

妻に抜かれるたびに趣味を変え

アホ役を追うて劇団つぶれかけ

大洲市 横田放人

結論に合わせて法を解釈し

名を思い出すまでにさつさと握手され

労働歌妻もちよつぱり口ずさみ

八幡浜市 別宮すき

いささかの金銭を寄附してそりかえり

手の荒れをかくし泣きごと云わぬ寡婦

ほほ骨が高いあんたもお人好し

鳥取県 藤本佳女

気安さが案内も乞わず上り込み

あきらめた竿へふぐ奴がひつかかり

伊丹市 春日青争

注射の子声はりあげておどすなり

海に山に往きたい子等に手を取られ

高知県 山川勝子

ステテコに白衣で医者も脈をとり

一泊のキャンプへ引越し程背負い

鳥取市 藤本鎮也

胸のバラ大きい方が偉う見え

同情の涙をかくす鼻をかみ

竜野市 森下峰子

ちゃんとした暮しが友を呼びたがり

人間のもらさ涙へ気が変り

大阪市 武居寿美司

しあわせは空虚の日なくすこやかに

髪型かえてすこしはましかな

尼崎市 平井露芳

テレビだいま十一人

百出の議論親父が出てまとめ

健保満期詮なしシヤバへ放り出され

笠岡市 谷本鈍愚坊

チト酔つて彼女の弱点つついてみ

働けず口は達者で憎まれる

松山市 西川みやこ

面影に媚び面影の人を抱き

往診の夫へすまぬあくびをし

高知市 田山文子

何時からか寡婦に寝酒のくせがつき

骨折つた成果は妻の座を守り

東京都 浅野竜泉

実力が有ってもコネに追い越され
かけ声で客を止めてるたたき売り

善通寺市 伊藤歌子

暑さ見舞水茎のあと涼しげに
この暑さチームワークの蟻の道

島根県 小砂白汀

責任を取りたく無いから口をとじ
さんさんにおだてておいて肱鉄砲

八幡浜市 平田三立

スタミナがつくと鰻の骨も喰べ
悪友は手ぶらで来ては夜を更し

大田市 藤田軒太楼

ほのぼのと若い善意に涙する
気の利かぬ邪魔が隣りにつかれる

堺市 斎藤亜也

日曜だ悪童が来るぞと猿のボス
離婚したおかげで株が上昇し

愛媛県 関本柳剛

サルビヤの瞳が濡れ居しが燃え始む
重患の金剛力で叩く蠅

米子市 林瑞枝

妃殿下でなくて良かったと云う昼寝
子の個性伸ばして親の欲ばらす

竹原市 時広一路

夏やせと言う弁解の骨体美
人と猫同じ金魚に見る違い

広島県 高橋鬼焼

自腹きるかくごで世話をひきうける
音痴でもいいさ日本の唄がすき

竹原市 三宅不朽

雲悠ゆう見涯ぬ夢と共にあり
長生きをしてねと言はれ佗しかり

八幡浜市 山本初子

いさかえば編むセーターの目もくるい
初鯉医者 of 禁酒もくそくらえ

岡山県 瀬戸山文平

忙しいことにかまけて詫びて来る
むし暑い日のアイロンの余熱着る

出雲市 王柴

城あとの石に物問う蟬時雨
お茶席へ踏む飛石の苔を賞め

大阪市 半田夏生

男体は雪の白根と隣り合い
華嚴今飛瀑の裾に虹が立ち

大阪市 鈴木生仏

螢狩りアベツク闇へ消えたまま

台風のニュースエプロン掛できき

高知市 永野舞子

尾道市 三国亜新

婦人科の患者女の業を説き

盲友へ

恐怖心乗せて難所をバスが過ぎ

涼風を呼ぶ風鈴に耳をかし

宇部市 櫛部いさ夢

立ち飲みの飴湯もうれし海の幸

ホステスのあくびも知らずねばつて居

尼崎市 井沢正夫

運賃で買える野菜を送られる

扇風機公害の町をかきまわし

鳥取市 近藤秋星

茨木市 高木繁太郎

盆を待つ心は会えるやも知れず

半世紀経てば御手植まで移動

くちなしの花が匂つて不在なり

愛媛県 嶺本満子

高槻市 山田スミ子

すがりつきたい愛をブライドが許さず

びんぼけの写真もあつて賞めてくれ

松山市 西川祥之介

鍵つ子を淋しくさせる雨が降り

手みやげにしては願いが大きすぎ

出雲市 竹内李朋

羽咋市 三宅ろ亭

こおろぎが蚊帳の何処かで鳴き始め

筆不精三通目には恐れ入り

前略と書いていきなり金の事

米子市 石垣花子

出雲市 竹内李羅

古都のビル歴史の跡に立並び

真直に帰る家路の灯が明い

仙台市 川村映輝

妻少しビールが飲めて座を任せ

原爆の威を籍る国がふえてゆく

河内長野市 森 本 黒天子
まとまつた金は手許で眺めたし

泉佐野市 佐 野 いずみ
信号無視今日も京阪同志討ち

大和郡山市 中 内 孚 彦
靴音へつなされた犬はえておき

広島県 南 条 露 声
いくら言うても駄目だがと意見する

青森県 岩 淵 一 星
早見表キレイに書いて平で老け

大洲市 堀 内 曉 風
不手際を詫びてそれから信じ切り

竹原市 小 島 蘭 幸
一人になればさびしがり屋の夫です

北九州市 藤 田 独 楽
お化粧は爪の先まで念を入れ

カルホルニア 斎 藤 流 路
労組があればと思う蟻ならん

大阪市 休 庭 一 休
夕涼み帰りのバスで汗をかき

松山市 河 本 南 牛 史
千円は小馬鹿に億も貯める夢

大阪市 木 村 濁 水
農繁期アクビしている猫をけり

八幡浜市 平 田 砂 生
男気を賞めて搦手からの寄附

大阪市 田 治 一 登
エプロンのデモは値下げへいどむ主婦

句集「よみうり川柳」第一集

岡山よみうり川柳に発表された句の集録であるが、選者池田あや子さんが独力でタイプを打ち印刷された一五〇頁の美本である。句も評も選者の眼のたしかさを示している。支局長辻村設道氏と「ますかつと」主宰大森風来子氏の序文がある。

(白柳)

一本のくさびが塔の美を保ち
運転手ひとり笑いの外にいる
浜田志賀夫

横部 橙 秋
道ふしんしあわせの来る道にする
藤原 秋月

昭和四十一年八月一日発行（非売品）
発行所
読売新聞 岡山支局

路郎川柳手拭い

子沢山僕のまぐらは

何処へいた

定価 百 円
送料 二十五円

東郷さんの

思い出

福井野迷路

日本に四さんと云う言葉がある。即ち死後もさん附けにして呼ばぬと語呂がわるい人が四人いるということだ。

曰く太閤さん、西郷さん、乃木さん、東郷さんである。仮りに楠さん、織田さん、木戸さん、岩倉さん、伊藤さん、板倉さんといつても誰のことかわからぬ。私のような末輩が明治の元勲東郷さんに身近かに接し得たのも東郷さんである。

「君はいくつになった」との質問に「ハイ四十四でございます」と答えたら「ふん若いもんじや、わしのちようど半分じやのう」といわれた。私がまだ大佐の頃だった。八十八才で亡くなる時の東郷さんのことを昨年人物短評として川柳塔に投句して

息のひきとり方までも偉らかった
を抜いて貰った。晩年や病中の東郷さんを語った文章は医家芸術雑誌に掲載された。今日

はこれとは別のとおきの挿話を述べてみたい。

大正八年、私が二十八才でまだ大尉の頃だった。明治大帝はお偉い方で人物を見抜く天才であつたらしい。皇孫の今上天皇の教育を東郷さんに頼まれ、乃木さんには学習院長として華族の子弟教育を頼まれた。

大帝亡きあと裕仁皇太子に対し東郷さんは東宮御学問所総裁を仰せつかった。當時は皇太子と同時に陸海軍大佐に任官された。大正八年八月下旬某日颱風を前にして太平洋の波高き日に、東郷さんから「皇太子と自分が今朝早く貴艦に乗って横須賀港を出て太平洋上に航海する」との緊急命令が出た。

当日は筆舌を絶する高波で私は軍医になつて日なお浅く、こんなひどい海上暴風に遭つたことがなかった。港を出ると艦は甚しく動揺して私はひどいふな酔いに罹り、嘔吐はする足腰は立たず、艦の動揺に死ぬる思いで軍医長室のベッドにしがみついて居た。その時艦橋から艦長の声あり「軍医長直ぐ来れ」とのことであつた。私は「軍医長は目中病氣中なり、行けぬ」と返事をした。次いでまた艦長から第二回目の命令が来た「皇太子殿下御病氣、直ぐ来れ」とのことであつた。これを聞いてびくつき、従兵に支えられてラッタルを上がってブリッジに来て見れば、これは如何に、皇太子は起立のまま顔面蒼白、すでに嘔吐していられるのだ。私はへなへなの体で殿下と共にあちちへひよひよ、こっちへひよひよ、殿下の吐物をハンケチで受け

ている位が関の山である。殿下に腰をおかけになるようにすすめるが、どうしても腰を下ろされない。

そうこうする中に看護長がコップと清水を持参したので、これをお飲ませしたら、やつと少し嘔気がおさまったようである。勿論お余まりを私が夢中で頂戴した。

ブリッジでは艦長、航海長、航海兵一同は皆自分の受持ちの仕事に一生懸命である。

その時ふとうしるを振り向いてびくつきした。そこには東郷元帥が厳然として立つて、私等の一挙一投足を見ておられる。実は私はひどい船暈で東郷さんのことを忘れていたのである。元帥が立つて居るのに、皇太子といえ大佐の身分で腰をおろせぬ理由が始めてわかつたのである。東郷さんの神々しい姿を眺めて自分の取り乱れた行為が実にぎんきに堪えず船がいともさめてしまったのである。

明治大帝が皇孫の教育を生前に頼まれたのをお引受けした東郷さんの教育とはこんな苛烈なものであつた。當時陛下は十八才、東郷さんは七十二才、私は二十八才であつた。東宮御学問所総裁としての東郷さんの或る日のコマであつた。それから十六年目、即ち昭和十一年に東郷さんの晩年に主治医として親しく接し得たのであつた。

至誠のかたまりのような偉い人物を表から裏からありのままを見せて貰つた私は幸運の持ち主である。英国民はみな日本海々戦の救国の英雄として英国民がトラアルガ海戦の救国の英雄ネルソン提督に対するようにならねばならぬと東郷さんと呼ぶ理由も判かるのである。

(筆者は元軍医中將)

秀句鑑賞

：前月号から：

後藤梅志

死のベッド母の乳房はしなびたり

(晃男)

母よ、という、突然の母の死に対する作者の、悲痛な叫びにも似た連作の一句だが「死のベッド」という稚拙な呼び掛けが「母の乳房」と相対して、童心に返った作者の感情をよくあらわしている。

母の死にまずその乳房が目に入るところは、極めて自然といつてよい。

どや一杯と路郎末座に来

(喜由)

「路郎忌に思う」の一句。おもうに、作者と路郎師の交遊は、大分久しい以前にあったものらしく、元気さかんな、当時の、人間路郎が出ていることは面白い。

殊に「末座に来」の一句が、面目躍如として紙面におどり、人間路郎の、半面を見る心地がするのである。

本号には路郎を追慕した秀句がおおい。

前歴を語る盃持つ手つき

(柳葉)

盃を持つ手つきが、前歴を語るということとは、ありそうなことに思える。しかしこの句の作者は、作者なりに一つの過去をもっているのである。それは、華やかな過去であつたらう。いたつてお酒が好きでもあつたことはこの句が物語っている。

作者が、高齢になると、いろいろな思い出が句ににじみ出て、滋味掬すべきものがある。

石頭居るので会社微動せず

(井蛙)

「微動せず」は、微動だにせず、のことである。元来、石頭というのは、融通のきかない、時勢おくれのことであるが、会社の経営には、こんな石頭があんがい堅実味を加えて倒産をまぬかれることがある。

石頭をもつて来て、この頃のあぶなっかし

い会社経営のあり方を、諷刺しえたのは手柄である。

御機嫌になるとスカタンしとうなり

(古方)

この作者の御機嫌になることは、一杯きこし召すことであらう。一杯飲むと、スカタンつまり「しくじり」をしなくなるとは、困った性分である。しかしながら、酒ぐせとしては、愛嬌のある方で、他人にはなほだしい迷惑を掛けなくても助かる。

自然の性情を、ありのままに描きえて、妙である。

へばりつく屋根の下にもある暮らし

(甲吉)

へばりつく、とは低い屋根を指したものの。バラックにも似た、ささやかな屋根の下にも人一人の生活があるという。北国の人生をふかく掘り下げた句である。

あたたかい、南国に居ては、想像もされないような貧しいくらしが、寒冷な地方には、あることを思わせ、警拔な作者の眼は、何物をも逃がさない趣きがある。へばりつく!! がよく利いている。

赤紙が酒場から来る夏祭り

(どんたく)

その昔、召集令状だったアカ紙が、酒場からとんで来るという着想が愉しいのである。夏祭りといえば、ワッショイ、ワッショイのお神輿かつぎから、ケンカ腰しのだんじり挽

きと、若者の天下である。

その若者の幹部が、一ぱいやっているところは酒場で、赤い顔をした、伝令がとんでくるところを思わせ、意外に、この句の、「赤紙」は功を奏している。

百姓でよかった工場見て戻り

(旭童)

維然としたキカイの騒音や、金属のふれ合う音。たとえそれが、近代式の大工場でもなくとも、決して、人の心を豊かにするものではない。

農村の人が都会へ出て、工場の見学をする場合は、半分あこがれの気持で見て廻るのだから、作者は、のびやかな百姓の暮しが、性に合つてると、観じたものであろう。

この句は、少しも力んでいないが、それなりに、日本人の性根を宿しているといえよう

たわし二個すり減り一年めぐり来る

(きさ子)

家庭の主婦は、一年のうちに、亀の子たわしを二個ぐらい、すりへらす勘定になるらしい。始めて聴く話である。

この句は、ただそれだけのことを、何の褒めもなく述べたものだが、半面、主婦の毎日のくらしが、如何に過労で、下積みであるかを物語って、無限のひろがりがある。少しも粉飾なく、淡々と述べたところが、老巧といわざるを得ない。

飛躍するすべを忘れた兎に似

(一栄)

思えらく、兎の悲願は、とんだりと、跳ねたりするだけでなく、せめてお月様のもとへ、行くことであらう。

この句は、どうしても行きつくことが出来ない、自分の句境を、兎に托して詠んだものだろうか。川柳上達の途ははなはだ遠い。作者のあせり、もつともであるが、何事も、道は近きにあり、である。

「おさえれば薄、放せばきりぎりす」川柳は、捕捉しがたいが、この句の出来ばえは、なかなかの出来である。

横断歩道キッチリ止る子煩悩

(与呂志)

キッチリ止まったのは、自動車のほうである。運転手の不注意による事故は、甚だおおいが、運転手に親ごころがあれば、めったに無き事故はおこるまい。

文明の利器も、一歩過まれば殺人の凶器となる。この句は、作者の誠実さが「子煩悩」の字句を生んだといえる。

白百合の律義に咲いてあわれなり

(水車)

白百合は、におやかに清楚なはなである。床の間にも活け、墓前にも供える。しかし、同じ百合でも、鬼百合のほうは、庶民的で、しかも、意外に色っぽい。

百合のはなを、いいなど感じるのは、庭前に咲いているときであらう。人間の非情さはこの姿のいい花を目がけて、チョキンと缺を入れる。

この句は、律義に咲いてというあたり、句趣を帯びて味わいのふかい作品となっている。

出勤路いつかジंकクスめいたもの

(清生)

われわれの出勤途上は、無味乾燥である。ラッシュに次ぐラッシュ。どこに、このろくろぎもない。その中にも、一日を安泰にというねがいは、誰れ彼れとなくもっている。

ジंकクスめいたものが、いつとは知らず、心に芽えるのは凡人の常であらう。おもしろい、見付けどころだ。

この句は、単調の間に、己れを見つめ、世の中を見つめ、ケレン味なく作句したものである。佳句である。

合掌をしても雑念かけめぐり

(干梢)

神仏を前にして、ピツタリ正座し、合掌をすれば、誰れでも身心一如となる如く思い勝ちだが、そうはいかないもの。落語にも、「小言念仏」というのがあるくらいだ。

この句の如く、何か煩悩がおき、心配ごとがあると、それこそ、雑念のトリコとなる。これは、誰れしも経験することだ。

だが、人間の自然さは、ただ単に、掌（たなごころ）を合せることにより、おのずと精神が鎮静してくることは、ふしぎな神の摂理というほかはない。

北京の紅衛兵

(大陸放浪)

東野大八

北京でノロシを挙げた紅衛兵のニュースが毎日のように新聞紙上はさまざまに伝えている。

北京に住み、北京でいまのカミさんを貰いそして北京から軍隊に入って行った私は、紅衛兵が暴れ回って「王府井大街」も「東安市場」も「北海公園」も「全聚德」も片っぱしから、とてもない革命用語の切れ端で塗りつぶしていくのを万感無量の想いで、ただみつめているだけであった。

昭和十八年ごろだったかと思う。「鬼畜米英討ちてしまえ」のスローガンによって、日本軍が、北京市中から敵性英文字を一字残らず追放せよ、と中国側へ申し入れ、徹底的な実施方を要求したことがある。つまり街頭から、横文字使用のあらゆる商標、看板、表識、ポスター類を抹殺し、決して使用すべからずというわけだ。だが

「他国者がうちへきて、何を勝手なことを

ほざきくさる」とばかり、中国民衆は根っからみこしをあげなかった。殊に北京の学生たちは、至極とほけた顔で、それどころかこっちは勉強で手いっぱいだ、という顔付でとんと没関心(メーカーンシン)だった。

ところがそれから二年、日本が無条件降伏するや、中国民衆は一斉に牙をむいて、在京日僑五十万の頭上から殺倒してきた。掠奪暴行殺傷強かん、言語に絶するその暴虐の波瀾の先頭に立ったものは、十代と二十代の若者たちであった。彼等は、素早くて抜目がなく、つねに集団体制をとり、一気カセイにコトを敢行していくというそのすばらしいエネルギーは、まるで研ぎすましたような利鎌の如き鋭利さを宿していたものだ。今回の紅衛兵の一大集団行動に、私は猛り立つそのかみの彼等の、圧倒的な迫力を想い、一種の戦慄をさえ、禁じ得ないのである。

終戦直後の、そうした民族対民族の血まな

ぐさい試験の対決がヤマを越したとき、私は張博望監修の「大陸新文学」にこんな詩が載っていたのをノートしている。

東方紅太陽動 中国出了個毛雜種 他是個人民大禍虫

(東が紅い、太陽が出た、新中国が生まれたが、それといつしよに毛虫がはい出した、これこそ怖ろしい禍いの虫だ)

毛雜種とは毛虫のことで、いわば毛沢東のもじりなのである。また、余談だが同じ本にこんな数えうたも出ていた。彼等も日本人なみにこんな芸当も心得ている。という参考までに、その字面と文句を味って頂きたい。

一面傾倒 一つ一重に毛沢東

二口無言 二つ二人で話もできぬ

三複被講 三つ三度四度も話は同じ

四匪霸制 四つよるにもイスがない

五更造飯 五ついつでも炊事は夜明け

六点排班 六つ六時に点呼され

七過一皮 七つなんともやりきれぬ

八字甘脚 八つやたらに身体がいたむ

九九呻氣 九つきゆうとうなり出す

十定猪精 十でとうとう頭がぼける

国民政府の機構を一応接收した中共幹部のいわば洗脳ぶりを、被害者側がよんだのが以上のざれうたである。

こんなころ、河北省邯鄲県の中共政府が、「日本の敗因は何か」というのを新聞で質問

したところ、「屈原」としやれた投書があった。屈原とは、人も知る中国の有名な詩人政治家だが、それをひつかけて、日本は原子爆弾に屈して敗けた。よって屈原であるとしやれたわけだ。これに対し、出題側は「イヤ、屈原にあらず、蘇武である」と

と答えている。蘇武もまた有名な中国の伝説上の人物の名なのであるが、もとよりこの蘇武にひつかけたのは、日本は原子爆弾ではなく、ソ連の武力に屈服した、といいかえたという次第だ。

邯鄲は夢マクラで有名だが、この俗説の中で、こんな問答をくりかえした向うさまだが皮肉にも紅衛兵はそんな因縁も知るや知らずや屈原も蘇武も現在批判の対象として、この

九月号に寄せて

— 清水白柳氏に —

池田あや子

九月号を三日も早くいただきびっくりしました。なかなか読みごたえのある柳誌で楽しみでございます。

亜鈍先生の短い随筆、たんねんに読みました。お目のご不自由な先生のご執筆に頭がさがります。大阪を恋われるお気持ち

二人のことを厳に口にすることを禁じたのみか、蘇武にたとえたかつての友好国の筆頭、ソ連に対し、ソ連大使館前で数回デモって、反ソ修正主義の強硬路線を打ち出している。

毛虫と数え歌のころの、ひよひよのその中共が、今日の強大さを誇るその二十年後において、なぜに紅衛兵のあどけない少年達の怒号に、その政治力の何かをかり出さねばならぬのか。解放軍報四・一八付社説はこう書いてある。

「『真実描写論』」「リアリズム大道論」「硝煙臭反対論（戦争反対）」「時代精神合流論」というそうしたブルジョアジーの文学、芸術思想は、現代修正主義文学に結びついた三十年代の文学。芸術であって、人民を搾取

胸に迫りました。

「大陸放浪・スナガリーの月」面白くて読み返しております。

新近在住の頃、夫が満電につとめていまして、その野球の応援にハルピンに行き、ホテルニューハルピンで一泊、翌日スナガリーの船つき場で友達と夕食をしたり、キタイスカヤ街のキャバレーに遊んだことなど思い出し、なつかしく回顧いたしました。

（よみうり川柳岡山版選者）

し、抑圧しようとする敵の階級の本質を美化しようとするものだ」

わかりやすくいうと、愛や死は永遠のテーマだということや、恋愛や低俗な趣味や回顧録は、ブルジョア的修正主義そのものであって、これが軍隊にある人間の身心の内部におよぼしてくるとき、革命の足なみは乱れ、人民の軍隊は勝利を忘れ、やがては人民社会そのものを消滅し去ってしまうおそれがある。

だから、そういう文芸や芸術はわが国にとっては怖るべき毒草以外のなものでもない以上根絶すべきだときめつけているわけだ。それが、「三家村ノート」「燕山夜話」「海端魚宮」「林家鋪子」などのつるし上げから火ブタを切った文化大革命となり、その百家騒鳴の猛台風がやがて紅衛兵の津波となって吹き上ったというわけだ。

「北京」という名も、毛虫のうたの冒頭にでてきた「東方紅」の市名と変えるだらうという話などを耳にしながら、私は、ある夜、防修路（旧王府井）の路上でトンガリ帽（さらし者のかぶる帽子）を頭にのせられて自分の姿を夢にみた。「大陸放浪」などくだらぬことを書いてる奴も、三家村グループの毒草の一本というのが私の罪名である。

（四一・八・三一）

・ 詠 ・

大阪市 橋本緑雨

長命の外はほかにか内は床つれ

前借をして初盆の帰り客

須坂市 高峰柳児

退屈な膝蠅叩きあてがわれ

割箸が歪んで割れた生返事

・ 近

反省をしている頑固のひとり言

今治市 長野文庫

秀才に人生冷たく割り切られ

葉屋の宣伝に依るノイローゼ

送料の切手見直す値ぶみ癖

夕立へ歓声あげるプラタナス

銀行の扉時間をよく守り

松山市 月原宵明

干ばつにみみずも枯れし死んでいた

バー喫茶マツチ竝べて独り者

私大にいる愚息専務の椅子が待ち

陽まわりのすこし衰れて斗志欠ぐ

いのちある句

(5)

戸田古方

一句では本当に無理かもしれませんが、一つの物語りの中心になっているもの、クライマックスをうまく見つけて、それをテーマに句作すれば全然不可能とは思われません。

また、連作という方法もありますし、昔はやった、劇的一幕と一幕の間に映画をはさむ連鎖劇的なやり方も出来ます。

万葉集には長歌というのがあって、そのあとへ反歌というのがついています。長歌の内容を短かくまとめたものです。この反歌はやがて短歌として独立します。ほんとうにうまい長歌もあるにはありますが、多くは反歌のためのメモの感じに感じられ、時代が下ると詞書のようになってしまいます。こういう詞書をつけた形が連鎖劇式とでも申すのでしょうか。さらに芭蕉の奥の細道などを見ますと、間にはさまっている句は情景や独立の出来事を担当してきます。

長歌と反歌のついた万葉の歌一組と奥の細道から抜書をして話をすすめることにしよう。

額田王近江の国に下る時よめる歌

うま酒 三輪の山 青丹よし 奈良の山のまに

い隠るまで 道の隈 い積るま

でに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも

見さけむ山を

情無く 雲の隠さふべしや

(三輪の山が奈良山の山のあいだに隠れるま

で、道のまがりかどが重なるまで、くわしくみ

ていきたいのですが、しばしばふり仰いで見

たい山であるのに、無情にも雲が隠すという

ことがありましようか。) (久松訳)

反歌

三輪山を然も隠すか雲だにも

情有らなかくさふべしや

(三輪山をそのように隠すものか。雲だけでも情があつてほしい。それが隠すということがあろうか。)(久松訳)

反歌から見ると單なる旅行吟でなくて、三輪山への深い愛情があらわれています。

次は奥の細道より、

「大聖寺の城外、全昌寺という寺に泊る。

なほ加賀の地なり。曾良も前の夜この寺に泊りて、

よもすがら秋風聞くや裏の山

と残す。一夜の隔て、千里におなじ。我も秋

風を聞きて衆寮に臥せば、あけぼのの空近う

読経声すむまに、鐘板鳴つて食堂に入る。

今日は越前の国へと心早卒にして堂下に入る

を、若き僧ども紙硯をかかえ、階のもとまで

追ひ来る。折ふし庭中の柳散れば、

庭掃いて出でばや寺に散る柳

とりあえぬさまして草鞋ながら書き捨つ。」

ほんの一節を抜いたにすぎませんが、全く

新同人紹介(一)

中 筋 三 幸

浜 光 治

雑 賀 勉

西 尾 義 一

土 谷 城 石

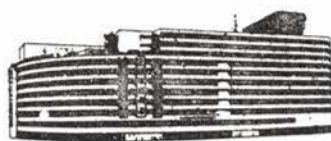
野 村 太 茂 津

上 田 利 晴

二 越 春 翠

以上、白柳・生々庵推薦

最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと
ハンシンは
皆様の百貨店です



大坂梅田・水曜定休

阪神

電361-1201(大代表)

見事な紀
行文であ
ります。
近代文学

とはいえないかもしれませんが、日本文学を語るもので、これを最高の紀行文文学といわぬ人があるでしょうか。また、万葉集を日本文学の最も貴重な遺産でないという人があるでしょう。こんなわかり切ったことを申しますのも、芸術が何であり、文学が何であることを確認しておきたかったからであります。句と地の文と両方で支えられていくやり方、こうした形で句と文を組合すことは、だが、誰もが今までによくしてきたことであります。

引用ばかりが多く、大へんお読みにくかったと思います。次回は話を川柳にもどして、中心の問題へ入っていきたいと思います。

手 ぶ ら

林 野 麿 光 選

こんど来る土産約束して手ぶら
旅馴れて手ぶらで帰る靴すべり
泣きごとに負い手ぶらで戻って来
手ぶらには馴れた生活の懐手
欲しいもの云えと手ぶらの見舞客
次からは手ぶらで来いと叱り置き
手ぶらで行って風呂敷までも借り
スポーツテスト手ぶらで登校皆恵美須
エキストラ手ぶらで歩くのも演技
半信半疑手ぶらでやって来た
出直すときめて手ぶらで帰って来
金策の演技手ぶらでやって来た
バイバイへ今日は手ぶらで帰れ
手ぶらでは寄れず電話で用を足し
おれおまえ手ぶらで敷居またが
手ぶらよりましの上げ底提て来る
教え子に手ぶらの旧師悪びれず
手ぶらではないぞ議員のお国人
足まかせ気まかせ手ぶらでずな旅
手ぶらでもやっぱりうれし里の母
手ぶらでは行けぬと意見いちがい

宗太郎 文子 百酒 代仕男 正義 光郎 木魚 繁太郎 佳女 保夫 古方 秋月 無聖 千代 晁男 鎮也 いさ夢 紫 亜新 秀峰 すぎ

起きて待つ子供に手ぶら云い聞か
お帰りも手ぶら子供を撫でて去に
大阪の夜店手ぶらで見てまわり
二八月金策手ぶらの日が続く
参詣は手ぶら身軽にバスを降り
わるいなあと手ぶらで飲んで去に
お手伝い手ぶらの横で汗を拭き
先生は手ぶらで来たが不審なり
計画的な家出 手ぶらで家を出る
手ぶらでと書き内心は期待する
もてなされ過ぎて手ぶらがしゃちこばり
泣き落し利かず手ぶらが悔まれる
佳 招かざる客が手ぶらで来てねばり
パチンコのドアを手ぶらで叩いて出る
手ぶらふと傘を忘れたのに気づき
週刊誌手ぶらにかっこつけて
結局は手ぶらの方が高うつき
人 顔色で手ぶらの奥を読んでやり
地 手ぶらで来た人のビールが居ける
天 まごころを汲み手ぶらの手を握り
軸 デパートのレジに手ぶら見返え
静水 可住 不水 芙己代 亜也 愛鳩 瑞枝 どんたく 素身郎 七面山 惠二朗 軒太楼 十九平 砂生 幽谷 花子 露声 礎山 不朽 千翁

体 験

若 林 草 右 選

体験は尊い汗の記事を知り
体験談古いと子らは聞いていず
体験をインタービューが追いか
体験を語れば戦後派笑うだけ
体験の恥も話してアドバイス
体験をうそだと見ぬく年になり
体験がまだまだモノ云う町工場
体験を語る寮母で暮れる
体験があつて出稼ぐ農閑期
体験と机上がもめる工務室
体験の病氣見舞は行き届き
体験に物を言わせた借り上手
体験をくり返しつつ嫁姑
体験が使えば動く発動機
体験の姑へ素直な嫁で居る
体験がないから言ふスケジュール
体験を積んで生活の糧とする
体験談などと受け売り話なり
体験がおそれる今日の山登り
大学を出て体験においつけず
体験の世間は辛い人の飯

芳子 正朗 晃男 魚山 千代 古方 保夫 礎山 木魚 光郎 野迷路 祥之介 南牛史 文子 宗太郎 代仕男 亜也 愛鳩 藤波 かつらぎ

学校を出て体験の鞭がまち
体験がスリの現場を見逃さず
倒産の体験自慢にもならず
ドタン場へ来て体験が物を言い
体験を語れば話に血が通い
大声で泣けば抱っこ小さい体験
体験を話せば古い父にされ
体験がピタリとあてる目分量
失敗に失敗重ねて出来たカン
下積みの体験滲む庶民性
体験が嫁の育児書氣にいらす
運鈍根小卒社長の体験談
体験から言えは学歴やはりいり
体験を生かして五人育てあげ
「体験は語る」に半分嘘があり

双 秋 白 龍 白 幽 不 章 亞 惠 紫 明 素 成 古
葉 月 泉 汀 谷 水 雅 新 二 夢 子 身 心
誤診からガンが治った体験記

垣

国弘半休選

生垣のみどりへ微風ささやいた
暴走の單車竹垣だけで済み
不運な木垣に植えられ傷められ
お隣へ分家二代目垣もつけ
竹垣に長靴はかせた雨あがり
垣にまた目かくし足して二号邸
朝顔にからまれた垣はめられる
宇宙から見れば垣なぞおかくて
高架線垣の中まで見て通り
垣越えるチャンスはドンファン狙ってる
生垣の茶の木茶人の好み
石垣の隣は低いトタン屋根
別荘の垣は手放さぬままに朽ち
背景の垣はピンとが外れてた
生垣の芽吹きあえなく刈りとられ
やわらかい芝生は垣の向側
青春を垣の向うで手が招く
落書のような垣根の禁止札
垣などはいらぬ暮しの中に居る
石垣へ雑草夏を軽く生き

生垣のみどりへ微風ささやいた
暴走の單車竹垣だけで済み
不運な木垣に植えられ傷められ
お隣へ分家二代目垣もつけ
竹垣に長靴はかせた雨あがり
垣にまた目かくし足して二号邸
朝顔にからまれた垣はめられる
宇宙から見れば垣なぞおかくて
高架線垣の中まで見て通り
垣越えるチャンスはドンファン狙ってる
生垣の茶の木茶人の好み
石垣の隣は低いトタン屋根
別荘の垣は手放さぬままに朽ち
背景の垣はピンとが外れてた
生垣の芽吹きあえなく刈りとられ
やわらかい芝生は垣の向側
青春を垣の向うで手が招く
落書のような垣根の禁止札
垣などはいらぬ暮しの中に居る
石垣へ雑草夏を軽く生き

垣一つ境貧富の差がひどし
垣高く高く隣となじめない
高山の植物守る垣が要り
竹垣のひとつといつしか道になり
垣越した枝へ舌打だけでおき
垣越えた交際親の目にあまり
遊び場の子等を追い出す垣が出来
生活をかくもう垣と見せる垣
石垣は古城支えている誇り
月の夜も闇夜も獄舎の垣不気味
玉垣は寄附の役目も背負わされ
垣せせる人の白髪は針に見え
垣柵の内での試歩を嬉しがり

古 藤 栄 静 白 破 鎮 可 秋 秋 月 月 山
心 波 一 水 汀 天 也 住 月 月 山

佳

揉みながら按摩の体験笑わせる
初恋の体験カルピスの様でなし
雪穴で不幸を詫びる遭難記
たこ壺を掘った愚痴をもつ云わず
体験は手を抜く術も教えとき

揉みながら按摩の体験笑わせる
初恋の体験カルピスの様でなし
雪穴で不幸を詫びる遭難記
たこ壺を掘った愚痴をもつ云わず
体験は手を抜く術も教えとき

人垣をかき分け事故の子にすがり
垣根越しお風呂があった声がくる
行水をかくす生垣灯が洩れる
ぶらさがるためにへちま垣を匍い
トラブルは知らぬ垣根の花ざかり

瑞 惠 惠 千 千 千
枝 二 二 翁 翁 翁

人

底辺に泣く体験を継がそまい
地 可 住

底辺に泣く体験を継がそまい
地 可 住

これ程にもめるとは垣知らなんだ
露 声

天

拾い屋の体験景氣を診断す
天 十九平

拾い屋の体験景氣を診断す
天 十九平

男下駄女の城の垣にする
文 子

二人目へミルクも馴れた母となり
英 子

二人目へミルクも馴れた母となり
英 子

善人へ坊主地獄の垣があり
軸

初歩教室

一題 「思想」



菊沢小松園

今月の出題であるが、明らかに失敗であつたとおもう。思想と云うような、内攻性型のかたちに見え難い題は、少なくとも作句の経験の浅い人達の出題ではない。相当の柳歴のある作家でも、困る題である。随つて応募された方々の、苦心されたあとも窺われて、気の毒なとも思つてゐる。良い句も少ないし、数も少ない。その中から熱心な人達の、これだけの収獲を得たことを喜んでゐる。出題の難かしさを、泌々と感じると共に、心すべきことである。如何なる題でも作句できることも練習ではあるが、題の如何が作句の意欲に影響することも事実である。

千夏

この兎にもこの思想あり亡びず日本
新旧の思想といえど筋は一本

主義に破れ初めておもう母のふところ
こうして同じ人の句をくらべて見ると、よく判ることは、その人の好みの型がある。よい時もあろうし、悪い時もあろうが、この

場合三句とも言い切つて、投げ出したよう
で、後に余裕がない、ピリッとした後味が残らなければよい句とは云えない。もつと先輩の句をよく味うこと、あなただけの熱心さがあればそのうちに、立派な句を咏まれることでしょう。下五、亡びず日本。筋は一本。母のふところ。みな突き放したようで感心しません。最初の句変えてゐるではだらけます。その思想その顔かたちまでも変え
大学生思想ばかりで食つてもいけり 祥之介
思想論ばかりでは食つていけないぞと大学生へ警告したつもりでしょうが、近頃の大学生活に、そんな夢はなく、もつと現実的ですアルバートの日給を気にする学生はあつても、思想を云々する余裕はなさそうです。
二月十一日という思想で儼の八十年

静観堂

そのものずばり二月十一日という思想で何物にも、超越した明治の牙城と云つたようなものを感じます。頑固なまでに、旧紀元節の日の、建国日設定を説く、人達のころもよ

く判ります。筋金が一本はいったという信念は、貴いものです。

うき草のような思想がジグザグし 句楽坊
若い人達の思想が浮草のように、まだ固まつていない、だから根無草の腰の据らぬフラフラ運動で、ジグザグやっていると見たのだから、年配の人の句として頂く。

紫

思想戦虚実を混せて踊らされ
虚実を混せてよく利いて面白い句になつた。無味乾燥な思想戦の蔭に踊るスパイの姿を見るような、花やかなものになった、佳句。

白汀

人を使う立場思想も右となり
親心も知らず赤旗振り廻し
思想も穏やかになつて来る。よい掴み方だ。親ごろころの句、親は都会へわざわざ赤旗振りに出してはいない、苦しい学費を送つてゐるのに。題意を生かした佳い句になった。

番茶一杯で思想とやらを聞かされる 徹也
思想とやらをでよく生々した句になつた。

初めから馬鹿にして聞いているのを、得意になつて話して人をも窺えて面白い、番茶一杯の味も、使ひようによつてパンチが利く。世を衝いた皮肉マンガに見る思想 軒太様
他の四句ともに、説明のかった余韻のない句に終つてゐる、この句も言切つてあとに、何も残らない、題の固さに負けないで、もつと人に迫るものがほしい。

麻沙吉

健康になつて思想がまた変わる
健全な精神は、健康な体に宿る、を句にせられたか、併し下五の、また変るが引つ掛る

のである。思想というものが、また変る程度の浅いものならば、一片の考えであって、思想までも行かない代ものではなかるうか、誇張も過ぎると、趣味になる。

右左思想の波を泳ぎ抜け

同

これも同じようなことが言える、技巧が過ぎて失敗の例、思想の波、泳ぎ抜けは夏向きながら御一考のこと。

友情は思想の相違気にもせず

正 朗

秀才の子を持ち思想が気にかかり

瑞 枝

縁談へ親の思想もプラスされ

千 梢

ちよっと色あっても人事課見のがさず

同

生活の重みに思想色が褪せ

す 子

こと思想一步も譲らぬ親子なり

鉄 舟

右の六句ともに、句意がよく判り、この欄

としては、まあまああつた。

末っ子の思想を明治聞きながらし

花 子

底辺に住んで思想も背伸びする

登 良 代

大学で思想の赤い子に育ち

鉄 舟

右三句とも、作者の意を枉げずに、手を入

れて見た。手許の控えと参照して見て下さ

い。句は二重の用語や、余計な語句を入れる

と必ずと言ってよい程、説明に終つたり、力

の弱い句になり勝ちです。贅肉を取り去らな

ければ、本当の肉体美は生れません。骨格を

包む肉は、不必要な、だぶだぶの肉ではあり

ません、人間の体同様、川柳にも贅肉は去ら

ねばなりません。

思想めいた単語ならべて旗をふり

正 直

進歩的思想とあって失業し

亜 也

思想など持ちあわさずに金儲け

同

思想などどうにでもなれ山に生き
一票へ妻の思想は動かない
公報にも堂々と書く思想歴
第一句、思想めいた、で赤い旗を振っている人々に対して作者の見る目が生きて来る。
第二句、あまりに尖鋭化した思想の持主では、人に使われ難い。第三句は説明のいらぬはつきりした句。第四句、どうにでもなれは余り捨鉢気分で面白からず、気にせず今日も山に生きこの程度か。第五句、無理に題を入れた句、選挙の一票であろうが、この場合は思想より、決意の方がびつたりするように思われる。第六句の思想歴と云うことがおかしい、思想の遍歴という人もあろうが、一般にはちよっとのみ込みにくい言葉、公報に思想はつきり書いておき、か。

堅実な思想が上役の目に止り

陽 子

思想とはかわりのない職に生き

湖 平

南北に別れた思想にも恋はあり

成 子

右三句がどうか句になっている程度で、

それも助詞に手を入れたものもある。他の句は

狂句あり、標語ありで、なかなか多彩なもの。

併しこうした方々こそ、この教室の御客さんだと思ふが、もっと柳誌を見ることが、他の

の方の句とくらべて見ることです。句意の見

当がつかねる句が多く気をつけて下さい。

引揚げて赤にされたは二三年

弘 朗

母さんの思想がシャモジ型になり

文 平

右派左派の思想をマダム使い分け

砂 生

左傾した兄も育てた同じ乳

千 代

最後に佳句を御目に入れます。四句とも

同

川柳塔雑吟に出して見劣りのない句だともう。ある意味では、平均にこの程度の句が出来たら、この教室の人ではないが、遺憾ながら他の句は大分落ちた。折角精進して下さい。

よう食えもせぬのにカントだデカルトだ

選者吟

十一月二十日締切 新年号発表

題「寒 風」 五句以内

宛 先

大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号

菊 沢 小 松 園

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏
大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

第百八十五回 (新年度第十三回目)

大 萬 川 柳

「ダブル」

入選発表

選者 清水白柳
 投稿総数 六百八十四句
 入選 八十四句

愛媛砂生
 CMがすんで画像がダブルだし
 八幡浜 すき
 恰幅のいいダブルの方が平社員
 西宮 芙己代
 お祝いがダブルって有難味がうすれ
 出雲 紫
 ウナ電と速達ダブルって来た無心
 熊本 芳仙
 二重衝突不談ですます顔でなし
 瀬戸 文平
 痩せてもやっぱりダブル中買
 島根 芳子
 マネキンとうまくまとったダブル中
 下関 不水
 吸取紙君と僕との名がダブル
 米子 瑞枝
 斜陽族ダブルやっぱりよく似合い
 大阪 雄峯
 マージャンはうってパチンコも取られ
 大阪 弓彦
 お見舞の言葉も品もダブルって来
 篠山 与志
 特売の晩業ダブル共稼ぎ

急患へダブルった医師の顔が吸江
 南河内 会江
 米子 千代
 箸箱も対でしずかに夫婦老い
 笠岡 要次
 産声がダブル産婆を慌てさせ
 豊中 古方
 週刊紙ダブルったままで持つてくる
 大阪 旅風
 もうひとり来るとわかつて泊る
 京都 句楽坊
 ダブルったうどんを居候に食わせ
 堺 一舟
 七光り効いて良縁ダブルって来
 大阪 万里
 同じ日にダブルって義理を欠く葬儀
 笠岡 白梅子
 また女かと産院で気をおとす
 神戸 どんたく
 ザ・ピーナツにしますと双児誕生し
 岡山 七面山
 悪友とダブルベッドも旅のこと
 大阪 野迷路
 大学なればこそダブルのも平気

大阪 琴女
 チップダブルって返えせとも言えず
 大阪 十六里
 披露宴知事かけ持ちの祝辞読む
 篠山 可住
 血圧を気にしてダブルよく似合い
 玉島 千翁
 ダブルテキペロリ茶漬のほしい顔
 大阪 痴亭
 鍵っ子へみやげがダブルババママ
 倉吉 弘朗
 たまさかにダブルで出るひやか
 大阪 文秋
 ダブル品売れずないもの買いに来る
 大阪 阿茶
 貰いものの鯛がダブルっておすそわけ
 石川 宗太郎
 ダブルってもいいと署名簿さし出る
 和歌山 木魚
 その話聞いたとも云えず猪口を
 宝塚 無聖
 縁談はダブルプレーで姉いも
 玄関にダブル待たして取次が
 島根 代仕男
 票読みに重複があり落選す
 支払うた分もダブルって請求書
 大阪 双葉
 アパートへダブルベッドのおきど
 大阪 形水
 ダブル癖について浪人滔がつき
 嫁貰う齡して大学またダブル
 とり戻すつもりへ負けがダブル来
 大阪 水客
 同行二人笠かたむけて心足る
 筆不精に拍車をかけて気が弱る

10月の句会
 南海川柳会
 時 二十日(木)
 題 「遊園地」「無鉄砲」
 所 「眩鉄砲」
 ナンバ高架上
 新和クラブ
 香川 酔夢
 貫禄をみせたダブルがまた汚職
 肩書がふえてダブルも板につき
 美弥 弘道
 金縁にダブルベテン師すきがない
 球神はほえみ給わずダブルられる
 児島 恵二郎
 決心と躊躇がダブル日のあせり
 祝電を二つ打たせた大安日
 大阪 春巢
 失恋の痛手ダブルにしてお帰る
 貫禄は服屋にダブルすすめられ
 西宮 多久志
 八年で大学を出て学士なり
 不渡りを掴まされるしボヤを出し
 大阪 柳志
 ダブル巾くじらで測る目を細め
 七五三ダブルの服で母を連れ
 高槻 静馬
 二校も合格どっちにするかに迷い
 たまに寿司帰るなれども巻いていた
 大阪 小松園
 ダブルパンチから起ち上ると根性
 腹違いの子と柄おなじダブル巾
 大阪 庸佑
 大学でダブルった奴が先を越し

満塁策ダブルつもりが打ちこまれ
ダブルを転校してはと持ちかける

大阪 滋 雀

親しさがダブルめ祝いの聞きにくる
暑中見舞二枚おんなじとこから来
肉買うてどっちも戻った共稼ぎ

岡山 十九平

共稼ぎ戸数制りまでダブルて来
映像をダブルせ別なムード湧く
選挙前暑中と残暑見舞来る

大阪 梅 里

ダブル着て任意出頭悪るびれず
言い負けたダブルベッドをそわけ
お眼鏡ですよと返盃せがまれる

増和 田 幸子

ダブル事故不快指数のせいにする
えび天へねずみダブルで異に落ち
ダブルでつまかいと身重よく食

新同人紹介 (2)

菅井康郎

楠本和三郎

中川淳子

ダブル貰うれしさよりもこわくさ
五 客

南河内 吸 江

転宅へ新聞牛乳みなダブルリ
メートル法まだ尺貫につき添われ

大阪 加賀 光 郎

留守番はダブルベッドで寝てこ
会費要る方は祝電打っておき

東北 好 郎

ダブル巾着うて子供と対にする
人ノ句

高 柳 静 馬

幸運がダブルて母を案じさせ
地ノ句

大阪 あい 一 舟

天ノ句

中元のダブルった品は開けもせず
大萬川柳ベストテン

大阪 弓 彦

水客

柳志

吸江

好房

美茶

阿馬

静人

清子

痴人

可住

惠朗

一三二〇九八七六五四三二一

一四 木魚 一七〇 和歌山
一五 文秋 一六五 大阪
一六 没食 一六〇 大阪
一七 春子 一六〇 大阪
一八 宗太 一六〇 大阪
一九 光郎 一四、五 加賀

次ぎの兼題「片思い」 五句以内
十一月の兼題「職人」 五句以内
締切表 十月二十五日
締切表 十一月二十五日
締切表 十二月二十日

大阪市阿倍野区松崎町
大萬川柳会

酒井五月

内藤幸子

田村美智子

嶋田三郎

以上・白柳・生々庵推薦

お買物は近鉄へ!



アベノ・上六
近鉄

アベノ 621-1231 上六 771-3331

☆柳 界 展 望☆



竹原の近頃川柳大会に出席された
(左から) 服部十九平・長野文庫・本田恵二朗諸氏

(橘 高 薫 風 担 当)

▼「川柳塔」発刊一周年を迎えた。感慨深いものがある。「川柳研究」は八月号をもって二百号となった。八月二十一日川柳大会を開催し、三太郎氏の碑は先程、本州最北端の竜飛岬に建立された。生前、路郎先生は北海道の最南端の岬に立たれて、こういうところ

研究」二百号誌上で、「何にもかも萬歳」と題する小文を寄せ、記念号を祝福されるときにも三太郎氏の「川添だより」に「子らの子ら」の健勝を祈られた。▼「川柳ジャーナル」では評論活動の貧困を補うため強力な「執学ぐるうぶ」を設定することとなった。▼第二十一回尼崎市文芸祭川柳大会は10月23日(日)正午から尼崎市中央公民館で開催。兼題・鉄・心・石・腸(はらわた) 選者は正木水客、森中恵美子、伊東

静夢、鈴木九葉の諸氏。会費百円。▼第十七回名古屋まつり協賛名古屋短詩文学祭川柳部の集句は八月末日をもって締切ったが、文学祭大会催事の作品展示会は十月五日から十一日までテレビ塔西、名古屋市教育館で、文化講演会は皇学館女子短大春日井演説をを迎えて十一日午後一時から同所で開催される。▼松尾馬奮一回忌法要川柳句会は九月二十三日午前十時から、青森県三戸町「西村」で開催。馬奮句集が発行される。

▼「時の川柳」誌上討議は好評裡に続けられているが、八月分では「柳俳二刀流は是か非か」について、堀口塊人、葵徳三、福島郁三、湯川銀界、坂井とおるの諸氏が執筆された。▼清水白柳氏(大阪府)は九月三日夜、本社の理事会へ出席後、急行「ななう」で竹原市へ。十一日近頃川柳大会に出席、即日帰阪された。▼大島壽明氏(熊本市)は八月五日、高木満山、大井正夫両氏歓迎の夕を持ちました。川柳塔となつて

から一段と強固に且つ立派な柳誌が発行され、生々庵主幹のお徳が窺れます。▼山田季賛、林野魁光両氏は八月七日広島平和祭川柳大会に出席交歓された。▼西尾榮氏(八尾市)は八月二十日から那須高原、松島、飯坂温泉、吾妻スカイライン、飯盛山、東山温泉へ五組のおしどり会で三泊四日の旅をされた。「大臣を君づけにして旅の酒」▼菊沢小松園氏(大阪府)は八月九日から令嬢、令孫同伴で若狭高浜海岸に遊ばれた。「三代に渉るきれいな水しぶき」▼八木摩太郎氏(堺市)次女榮美子さんは川端茂氏の媒酌で阿部孝次郎氏の三男宏氏と十月十一日綿業クラブで華燭の典を挙げられる。お慶び申し上げます。

▼堀江正朗氏と芳子さんは(島根県)おしどり柳とあして仲睦く精進しておりおらが、愛嬢の高校演劇公演のため、四人の生徒さんの三泊四日のお世話なされたが、愛児三人と合せて七人の食べ盛りを抱えてさかさかグロッキーになられた。なお、白柳氏からの手拭いと薫風からの短冊の贈呈をよろこんで戴いた。

はげめ・かぶれぬ白髪染

男まえ理容

環状線寺田町裏駅南一丁

味わわれ、余暇があり過ぎると又何も出来ぬものですと羨しい便りを戴いた。

▼辻晩穂氏(北見市)は八月十四日に函館市で開催の北海道川柳大会に出席され、三太郎、夢二郎、大先輩と柳談を交わされた。周氏は欠席、鈴波氏らが代った由、なお晩穂氏は「オホーソク」の運営発行に再び当るのに当たったとの事で今後の活躍が期待される。

▼佐藤正敏氏(与野市)は八十五キロの巨体なので今年の暑さを持って余しておられる。

▼川岡霊眼子氏(諫早市)から「来年は次男が大阪に定着生活しますので大阪に

本社常任理事会

九月三日午後6時から第8回常任理事会が本社階上で開かれた。

路郎賞作家が決定するので北川春果審査委員のほかは全部そろった。

封筒に入れたまま審査委員長生々庵主幹の前へ積み重ねられた。心なしかみな緊張したおももちである。だが提出されたものは、そのまま主幹があずかることに、それを主幹の手で路郎賞作家を発表することになった。

「来年度は早目にかかろう」

参る度合いも多くなり編集部の方におおきくお返しする事もあるとうと今から楽しみにしております。霞乃先生や生々庵先生によりしくご厚声下さいます。」

▼福島鉄児氏(門真市)は七月三十一日弓削へ帰省墓参をされた。「路郎先生句碑も健在です。川柳社会長佐藤竜山坊氏を早鳥の療養所に見舞いました。故郷も暑かったので八月三日早々に引揚げました。」と。

▼山田季賛氏(高槻市)は八月十日山陽新幹線新大阪工事区のアトラクションで山陽電鉄東二見駅下車、船で沖のペラ釣大会に出席、初めての海釣りを楽しまれた。「ペラ・キスの土産を

子等に賞められる」

▼丸川初甫さん(芦屋市)は八月十三、十四日の両日明治村を見学、帰途、名古屋の御園座で観劇された。「百年の歴史を見せる明治村」

▼前田喜代人氏(下関市)から残暑お見舞いを頂戴した。前田一家柳多留万句合、昭和四十四年刊「一杯冷め」も是とする友を持てあぐみ、さそひ社氏(く)喜代人、以下八名のご家族それぞれ、その句が紹介されてあった。「なお下関市入江町五の一二番地変更になった。大阪府堺市中田出井町一丁一

番十一号。

▼傍島静馬氏(高槻市)は八月二十日から二十八日まで夫人と令孫二人を同伴、信州小諸、軽井沢、浅間、善光寺を巡遊「浅間川日霧のベールですすねて」

▼越智一水氏(今治市)は九月三日京都で開催の「郵政川柳大会」に出席、観光めぐりが五日で本社句会に出席できず残念。九州、四国地区の役員をおしつけられたとのこと。

▼故田中辰二(鳴風)氏の川柳句碑除幕式ならびに慰霊祭が八月二十一日午前十時半から熊本市清水町亀井岩倉の自宅で盛大におこなわれた。

▼宇和川木耳氏(布施市)と東野大八氏に大井正夫氏(八月二十一日梅田駅で落ち合い、ミナミへ行くはずが阿倍野までバスを乗り過ぎ、三氏はただわけもなく松江梅里氏宅を訪問、大いに柳談を交わされたが「肝心の一三夫さんを訪ねなかつたことを後悔している」

と大陸トリオのおたより。▼中島生々庵主幹は「第18回西日本川柳大会」の選者として十日の午後出発、その前後祭に出席、多くの柳

人諸氏と歓談された。

▼藤原秋月氏(岡山県)は昭和27年からの入選数を調べると三四七六句、28年から出席した句会の数は一五八回になり、こんごも生命ある句を目ざして頑張ること。

▼正本水客氏(大阪市)宅が、九月十七日午後三時ごろ隣家からの出火で二階を焼された。同区に住む小川恒明氏が駆けつけ、諸方へ電話連絡をされたが、まことに気の毒である。なお、ご家族はご無事だった。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

▲タケタ薬品
アリナミンA

本社 九月 旬会

会場 自安寺
五日 午後六時

川柳忌のころは例年ならずこしは涼しくな
っているのだが、こし暑さはまったくお
はなしにならない。そのせいか今月も六十人
を割ったようである。

今月の柳話は川村好郎氏だが、まず路郎賞
審査の苦心談にはじまって、ご自分の新人育
成の苦心談などが独得の語術で三十分間をグ
ンゲンひきずっていく。

そのほか川端東雲楼氏が、川柳家としての
省略法をいかして語るはなしぶりを興味深く
柳話にのせられたのが印象的だった。
十月は一周年記念句会である。ご健吟を祈
ります。

席題「トリック」

児島与呂志選

トリックと解ちちやいけるけどひやとし
トリックプレーかかった方が感心し
清張のトリックめしも食わず読み
トリック映画へおとなもつりこまれ
トリックを其の場は感心して見とれ
怪談のテレビ人魂糸で飛び
トリックで一人のスターが二役し
トリックと知っても乗って見たら恋

武助 柳宏子 淡舟 一三夫 武助 露芳 誓二 三司

てんどどんなトリックだろうと身構
友釣りと云うトリックにかかる鮎
トリックと見ぬいて孫から笑い出し
トリックのないサーカスと危なく見
奇術師のトリックという黒い布れ
トリックのように台風向きを変え
トリックと知りつつプロレスつい力み
トリックのように取込み消えちまい
カメラの魔術氷の中にいる女
あれトリックやでと孫に教えられ
トリックのうまさだまされてから気付

席題「現代っ子」

樋口舟遊選

膝上のセンチが気になる現代っ子
親の責任やでエと現代っ子
おっさんにコーヒさそつてもうかつた
現代っ子希望を問えば小さすぎ
今日あって明日を云わない現代っ子
現代っ子イエスかノーをあせるなり
現代っ子家の貧しさ口にせず
グループは紅一点の山の小屋
現代っ子趣味と個性をかざりたて
欲求不満体臭となって現代っ子
野性的スリルを好む現代っ子
現代っ子僕の思想とチト違い
クラス会現代っ子の考え述べている
利那主義スピードに挑む現代っ子
現代っ子あっさり一線越つちまい
赤いシャツというが似合う現代っ子
話し合いというが似合う現代っ子
ボーリングエレキモンキもこなしとり

生々庵 句楽坊 吸江 白漢子 白柳 金三 痴亭 静馬 淡馬 静馬 与志呂 失名 多志志 清人 すゝむ 静馬 いさむ 花梢 たつみ 生々庵 句楽坊 季賛 甘草 干梢 誓二 淡舟 古方 あいき

キスシーンきつちり見てる現代っ子
結婚もテストケースでやって見る
現代っ子明日は明日の風に舞い
現代っ子恋を知らぬを恥とする
ブランコへ或る日捨てたる現代っ子
現代の映像鍵っ子鍵守る

席題「先祖」

長谷川三司選

墓地だけを残し先祖の田も離し
先祖から味を守っているノレン
ご先祖が見てはりますとたしなめる
ご先祖の額が見下す社長室
よく飲んだ先祖にこりて下戸の婿
先祖代々の家にベニヤ張り回し
ご先祖に申し訳なき子が育ち
お先祖はどうであらうとすきはすき
ご先祖に申訳ない土地を売り
ご先祖へ今日の御礼の南無阿弥陀
系図まで出して先祖のPR
無神論者ご先祖だけは手を合わせ
新教の口が先祖にまで及び
横堀川先祖の頃もこんな及び
亀の池先祖の名前が浮き沈み
見も知らぬ先祖へ花嫁手を合わせ
御先祖を誇り老舗を近代化
御先祖に詫びて非行の子をさとし
和尚から方丈で聴くお家柄
大阪に住んで先祖の名を言わず
倒産の悔い先祖の石に詫び
ご先祖を又引き合いに座される
晴れ姿先祖へ母も正座する

滋代 芙己 武助 金三 天樹 舟遊 梅里 弥生 宏子 静馬 白柳 与志志 六龍子 宏子 滋雀 義雄 花梢 たつみ 古方 清人 清人 柳宏子 双楽 金三 白柳 葛城 滋樹

再起いま先祖へ両手ついている
お先祖へすまぬ大石寺詣り

兼題「ステレオ」

辻 白溪子選

天 樹 三 司

二人目が出来てステレオは飾るだけ
聞きせぬステレオ女の見栄で買ひ
早朝割引きステレオ喫茶混んで
ステレオはカタ文字ばかりのプログラム
ステレオも持たして嫁りたい親の見栄
商談の部屋にステレオ鳴りつづけ
ステレオの苦情母も妥協の立話
ジテクボックス銅貨を入れた旅の宿
ステレオが両隣りから攻めてくる
ステレオが流れるマンシヨンの昼下り
ステレオのエレキヘチャンネル切られる
ステレオが止んでひとしき虫の声
ステレオを賞めて無心の膝進め
応接間のステレオ客に見せるだけ
ステレオのボリウム深夜かきまわし
ステレオと二人ブランデー掌にぬくめ
子が出来てからステレオを掃除せず
不合格だったかステレオは買わされた
ステレオの音六畳に大き過ぎ
ステレオが我が家の暮し派手にする
ステレオのボリウム上げて浪花がし
ステレオを聴くより趣味のない男
応接のステレオ掃除するばかり
かけるより見せるマテレオでんと据え
ステレオの声あまってる四帖半
ステレオを据えて下宿を狭う住み
受験期の子へステレオのよう父と母

いさむ たつみ 昭三 金三 金三 芙己代 舟遊 弓彦 弥生 磯山 花梢 滋雀 いさむ 花梢 白柳 静馬 形水 季賛 みよ 淡舟 白柳 すゝむ 葛城 柳宏子 凡九郎

ステレオのテストレコードばかりかけ
ステレオ事務所に運ぶクリスマス
ステレオを買って浪曲遠慮され
ステレオのムードに酔って手お握り
ステレオが邪魔にされてるめたい日
盛り場のステレオ表へ音が抜け

兼題「欠点」

金井

文秋選

欠点がなさすぎ夫頼りない
興信所ようまあ欠点探し出し
欠点を見ぬいたように眼で笑ひ
欠点の二つや三つ嫁くとする
欠点を素直に聞いて見直おされ
たわむれの恋欠点を口にせず
金のないのが欠点という男
欠点だらけで堂々と代議士の顔



出席・与呂志・古方・三司・甘草・

八郎・薫風・白溪子・たつみ・文秋・
葛城・梅里・専翁・花梢・美房・六龍
子・一舟・すゝむ・柳宏子・双葉・弘
子・誓二・好郎・弥生・滋雀・一三夫
・いさむ・露芳・静馬・芙己代・痴亭
一扇・多久志・吸江・弓彦・義雄・白
柳・金三・凡九郎・みよ・舟遊・メ女
・淡舟・宏子・あいさ・千梢・季賛・
清人・句楽坊・有子・形水・生々庵・
天樹・寿子・武助・葉子

古 方 宏 子 吸 江 淡 舟 与 呂 志 白 溪 子 柳 宏 子 い さ む 吸 江 八 郎 白 溪 子 白 柳 与 呂 志

そろそろあはたがあはたに見えはしめ
他人様の欠点はかり気にかかり
先生の欠点仇名でししたまれ
欠点とひとは言うけどそこが好き
自惚れて己が欠点棚に上げ
弱いなあ欠点結局嬉しがり
欠点はないけど虫の好かん人
欠点は優しいすぎてとのりけれ
子の欠点他人に言われて腹が立ち
抜け駆けをして欠点を見いだされ
ライバルの欠点までが良うみえる
欠点があるから我慢した特価
敷いて居る嫁の欠点はかりみえ
欠点となる酒ぐせに酒がある
欠点をかくす真夏のスラックス
家裁まで欠点さらけ出しに行き

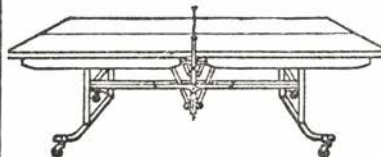
どんたく 旅風 芳子 正朗 繁太郎 芙己代 たいき 好一郎 葛城 柳宏子 舟遊 滋雀 舟遊 弘子 痴亭

新機構

Delica

デリカ卓球台

簡単にたためて
手軽にうごかせ
どこでもつかえる



福井工業株式会社

不束と云うて貰うてその通り
太陽にも黒点がありゆるす肚
欠点が目立たぬ人で出世せず

兼題「計算器」

富岡

淡舟選

計算器帳簿の穴を見付出し
宿題のお世話にもなる計算器
計算器と言われ経理の平で老い
計算器チャンと合つても儲からず
花生けるひまも作れた計算器
客の列悲鳴あげてる計算器
スーパの出口をふさぐ計算器
合理化へ酷使されてる計算器
計算器はつきりきめ手出る落ち目
計算器だけが夜中のビルに起き
相性のよさも知ってる計算器
計算器疲かれを知らぬ音をたて
計算器給料前の音になり
キーパンチャー魔術のように手が動き
レジの娘の笑顔と別の計算器
計算器はいつて職場変えられる
帳尻が合わず計算器派手な音
計算器非情へ容赦なくはじき
計算器ふやし事務の首を切り
計算器のニクネームで気に入られ
腑に落ちず読み合わせする計算器
計算器のような男で抜目なし
四ツ玉で確めたる計算器
キツチリと計算器だから進算する
つり銭はいくらぬに困る計算器
計算器は素通り機みつという支出

双楽
好郎
文秋

誓二
一三夫
梅里
喜仙
野迷路
正朗
芳子
生々庵
吸江
生々庵
花梢
好郎
多志
三司
静馬
いさむ
天樹
干梢
梅里
いさむ
静馬
清人
凡九郎
三司
痴亭

計算器のような男で骨が折れ
数学に弱く計算器にたより
計算器も使いお稲荷さんもまつり

兼題「裏」

若本多志選

慕情絶つ口と胸とは裏おもて
裏むけの浴衣に櫛がきいてる
眼で誘う女の裏にある野心
絹ごしの裏がうつつて柔い肌
御無心も名刺の裏で生きている
はつたりが当つたあとの裏話
裏からの御帰館防犯がじやま
道頓堀裏はネオンでこまかされ
十年の恋もさめまます足の裏
垣根越し裏から留守を頼んどき
夏遂に越せず病院の裏を出る
裏口に馴れて玄関落付かず
内心は許してやりたい裏話
この裏はきつときますと教祖様
裏の裏よんで話は聞いただけ
名案の裏にワイフのアドバイス
口裏の謎がとけないまま別れ
越境へ裏から頼むコネがあり
裏口を幼稚園から教えられ
口笛が裏から聞ける恋があり
長が生きは月の裏まで見せてくれ
裏表どちらも使う生地を買い
ペラペラの紙にもあつたうらおもて
片腕と云う番頭に裏切られ
やは肌を抱かして裏をさぐる性
ここのだけの話銭湯の裏話

武助
梅里
舟

芳子
五男
弥生
金三
文武
秋江
あい
吸江
花梢
淡舟
好郎
柳宏子
みつみ
双楽
静馬
三司
梅里
武助
双楽
喜仙
昭三
メ女
干梢
みよ

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 三四五二一四
夜間 四四〇八

裏返る下駄に明日は雨にされ
こんたんのある裏道へ誘われる
裏口へ逢いに來ている犬が鳴き
舞台裏を出待つ馬がビースの輪
口裏を合わす保釈の金を積み
葉の裏で毛虫蛾になるまでの宿
阿呆らして聞く気にならぬ裏話
楽屋裏中將姫も毛毳出し
裏町で旦那にされた夜を酔い
裏表上手に使う職に生き
裏の裏只蚤だけが知っていた
裏からも入れるホテルの御親切
殿様に座蒲団がない楽屋裏
泥棒はここから逃げた裏を閉め
裏目七たび八起きへまだ遠し
棘ささる言葉の裏に愛が住む
裏に裏あり現実の面白さ

露芳
美房
梅里
六龍子
章雅
滋雄
義亭
清人
季賛
野迷路
清人
生々庵
三司
一三夫
天樹
多志



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

パーティーのどのグループも笑っている
貯金箱はたいて贈る子の善意
一応はこうなってますがと気をませ
予備校で議論している国訛り
賽銭は小銭の音も引け目なく
金のほかならと云う味方ばかり
表向きも裏向きもなく惹かれ
落目もう味方にまでも裏切られ
さも味方らしくかげ口取たれ
パーティーの右へならえてマナー
お駄賃に小銭がなくて出し渋り
銀行へ今日は小銭の用で行き
名刀のかけに合樋はつとかれ
合樋を打ち打ちぐる廻のれん
小銭ひろうて小心の胸さわぐ
いざと云う時は出る気の子に譲り
児が出来て姑味方になってくれ
散票へ頭を下げた火事見舞
合樋を打つ伯父さんに金がない
子供等が可愛想でとあと貰い
予備の皿目立たぬかけは入れておき

水客 梅里 柳宏子 柳志 恒雅 章明 静馬 滋清 芙代 千方 古方 双楽 弓彦 痴亭 白秋 文柳 静歩 金三 好松 小園

小銭ばかり扱って儲けとり
予備金があればと思う火の車
ライバルも味方と思う気の弱
敵に皆廻ってあった味方の票
旗色を睨みあわして味方する
小銭からコッゴツ貯めて家を建て

玉造川柳会 (大阪市)

西出一栄報

犬の耳不思議な程によく動き
手の蟹は自分で缺もいでき
生きるべく苦闘ビツコのキリギリス
半袖に上衣をさげて汗を拭き
井戸水の魅力へしはらぐ夏の朝
男ふと夜空に心のぞかれた
星一つ見えぬ夜空のむし暑さ
君と居る時の夜空は美しい
ブルー背にボーズも水の女王とし
海にきて真水のブルで泳いで来
有料のブルで芋の子にされる
こんがり焼ける油が浮くブル
二時間待ったブルで濡れただけ
ひきまのブルで楽しんどの水着
新記録ブル一瞬しんとする
商魂がこじれた話へまだねばり
こじれると頭を下げてでもみ手ず
縁談がこじれた母娘がもの言わず
入知恵にままとまる話までこじれ
出勤にキッス忘れてふくれられ

小野田川柳会

国弘半休報

記念品出しては僂ぶ友の顔
記念日を妻だけ知っていたお膳
果立つ子の記念に校庭の花時計
記念日へ襟を正して立つカメラ
夕涼みかねて買物夏の街

八郎 季賛 宣介 野路 近衛 喜仙

金三 風仙 照柳 白方 凡九 中尼 雀踊 文章 野菜 文秋 柳子 六龍 千葉 滋雀 貞念 良山 静馬

むき出しの腕もまぶしい夏の街
夕立が欲しいと並木も葉もしおれ
街すじの女暮さに強くみえ
陽のあたる方が空いている夏のバス
宿題はラジオのリズムで片付ける
宿題がなかったババと遊べる日
生ビール腹の底まで冷える味
冷えて来た頃にビールから出る用事
キャンプ村冷えた空気を肌で吸い
冷えきった愛は憎しみだけ残り
市場籠涼しいうちと夏の街
笑われてお化けもドツと笑い出し
鯛の眼にお化けに見えた大くらげ
おどろいてやればオバQとくいがり
添えぬならお化けになると強い腰

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

お迎えの車を返えす万歩計
万歩計歩くに京の寺はよし
万歩計なんて歩ける暇がなし
海の子にブルは何かも足りず
夏休みブルは芋の手洗うよう
窓越しにブル眺めて仕事する
婆ちゃんの花火は孫の氣にいらず
彼女にすがりついてゆくブル

交通局川柳大阪 (大阪市)

児島与呂志報

淡舟氏の長命を祈る
陰の仕事君もよくやってくれたな
功ならず名達げす定年来てしま
身売りする市電の歴史しのばれ
枝切られ幹を切られて行く市電
富よりは義理が大事とは立派
痴漢出るうわさの岡で虫が鳴き
夏の海見えてロマンな岡にする

頼子 九呂平 迦落 菊醉 純昌 つとむ 霞花 六道 草弘 半夢 花休 清美 愛論 竹莊 幸男 夏生 甘草 風仙 草右 風仙 洞

失恋のビヤガーデンに淡き月
淡々と語る人生五十年
淡々と答えて尾っぽ掴まさず
人妻でよし初恋は淡いもの
塩焼きのキス新鮮な淡さあり
後悔をしていける筈の淡笑い
アルバムへ淡い命の娘が笑い
かき舟へ風情を添えて月が揺れ
舟べりの恋の二人へ灯がゆらぎ
夕焼けの池に笹舟一つ浮き
渡し舟蝶がもつれて尾いて来る
舟立つと揺れて大物ひっかかり
舟おりてから飲み友達心合
旅先へ知らず男の子の誕生
ペン草富豪の屋根も古びたり
笹舟の頃の少女は振り向かず

大鉄川柳会 (大阪市)

辻白溪子報

小柳也 欣也 凡々 笑風 継之助 醉升 雅万 孤舟 一乃字 胡蝶 翠芳 季賢 鉄児 春巢 与呂志

カキ氷子等楽します夕涼み
えんまドキリ膝上十センチ
えんまとも仏ともなる金を貸し
にわか雨避けてえんまの軒を借り
えんまの夜店いかさまにひっかかり
蚊遣りなんのその蚊がさしくる
グラスに氷鳴らして一氣に押す話
来賓の祝辞が長い花氷
おみこしの通りに祭りの人が揺れ
そうめんが冷えて宵宮の雨あがる

ウイロー社句会 (ハワイ)

快夢起報

内海 浅太 魔花麗 浮葉子 蒼蛇棲

さすが師匠社長の小唄も糸にのせ
青い目の踊り師匠も出る時世
撥さばき軽く師匠も踊りそう
人相で体よく宿を断られ
前歴が目限に光る薄化粧
人相と目前に不動は親しまれ
あやまちが女の人相交えさせる
貧すれば鈍する人相まで変り
お世辞にも女難の相と言えぬ顔
きらりつと金難が人相兼ね
人相も懐工合で交って来る
別々な人相肚の探り合い

いずも川柳会 (出雲市)

尼緑之助報

快夢起 拝山女 卡罗山 万里歩 峯溪円 雪女 柳葉水 泉木 柳舟 曉坊 三石

改造はしたがサーピス元のまま
見晴らしの視野に我が家小さすぎ
鳥籠を覗けば雲浴びせられ
子供らが帰って来るよ盆を待ち
改造の裏をかせせば自己保身
生ビール外氣にふれた玉雲
改造の余地を残して売り急ぎ
一滴の雲となったて空となる
竿の露横に走って雲する
改造の茶室の間取り祖父好み
襟先へ朝の松原一と雲
改造のきつかけ持株ハネ上がり
雲まで押したいので傘下に居
提灯も派手に今年は初の盆
大山がまともに見る二階借り
見はらしへ街とは違う風があり

南海川柳会 (大阪市)

辻圭水報

宏子 昭月

手数料ひけば淋しいお手の内
子の使いきつちり手数料をとり
配達の手数料だけ引くと言う
手数料聞いてキャンセルやめにする
病人でもあるか隣りへ往診車
町内の寄附は隣りの額にふれ
お隣りは任意出頭汚職らし
連休の隣りのプランド打診する
打ち水を延ばす隣りが仲が良し
再婚へ聞かれたくないことが出る
再婚の友絵葉書に仲が良し
再婚にかすがいの子が邪魔になり
再婚をすれば義理の子よくなつき
再婚の人に再婚勧められ
再婚の妻の音が向うずねに住み
髪染めて老父のムードまだ若し
結局は政府がわるいアンケート
姿見え舌出してみるも男の子
死ぬ覚悟してまで添うに親がおれ
退社して帰って夏の陽へ気兼ね
一身上の都合結局くびになり
七面短詩型文学クラブ (和歌山)
二階から焦げ臭いぞとどなられる
洗濯機下で預けて二階借り
退避した二階へ妻の文句が来
おちのびて二階の窓に肘をつき
看板に二階かかせし店続く
二階までずいと思わたり舞台度胸
二階から又灰皿を値りくる
二階借り首だけ出して用を足し
冷房へ扇子を出してあがり気味
冷房して今日も一日出そこない

高知川柳社 (高知市)

川竹松風報

句念坊 圭山水 和山 勝子 舞洋子 吞司 武志 伊津志 古文坊 句念坊 小真城 紅雨 蟠蛇 松風 竹莊 夢破 大松 松風 竹莊 夢破

— 62 —

味気なきひととてビールで涼をとる
涼みの台漕をすれば影とやら
高張りの自慢が競う阿波踊り
売出しの提灯不況の風にゆれ
汗拭きて写経の筆を持ち直し
汗臭いバス通勤の顔を積み
鬼瓦見下ろす神輿渡御の汗
さりげなく拭いて上げた玉の汗
那智の滝しづきの音で汗引き
ただコネル汗の子を刈る散髪屋

たけはら川柳会

山内静水報

金魚鉢猫の屈かめとこへ置
金魚へ金魚も勝手ちと違い
冷房へ金魚も間に着るらしい顔
風鈴を金魚も聞いてるらしい顔
金魚売り金魚金魚と夏を呼び
大胆に金魚女王のように揺れ
孵化させた金魚メダカのように
おまけして貰った金魚が越した夏
子のいない夫婦金魚の水をかえ
運のいい金魚優しい娘に買われ
呼びにきた姉と一緒に金魚釣り
金魚鉢のぞいて今日もホットポ
一匹になったか残暑の金魚鉢
お姉ちゃん浴衣にする祭の日
今日祭り父は朝から酒を飲み
故郷の祭りはみんな知った祭
祭礼を遠くで拝み祖母達者
聞き訳のない子祭りの中で泣き
線菓子を食べて祭りの気分なり
お祭りの花火見せたい児は眠り
お祭りの日が忙し職に馴れ
風船の下祭りの父子像
祭り客出して母の仕舞風呂

ひでを己代治小はや白石たつ進之柳点心南
柳坊信介を石を路を

政正蘭一清静花浄勝宏無澄房操房静不幸茶不花松博
己 幸路 火仙美彦 門惠枝子子水勳子女朽洞緑司

お祭りの太鼓が早く来いと呼ぶ
 王巻の花火で終る夏祭り
 孫が来てどうにか祭りがしくなり
 小遣がたりんと祭の子が帰る
 恋人へ返り祭りの腕を組み
 祭太鼓たくさんく男の太い腕
 御輿を車にお乗せした祭り
 夏休み三日の旅にアルバイト
 家計簿にまたアルバイト目をむり
 アルバイト倒産前とは知らず
 返事はきれいな兄に出すはがき
 花嫁の修業みよはな夏休み
 隣りまで行くのにやはり髪とき
 笑顔だけ作って私はアルバイト
 おじさんと呼ばれまだまだ独り者

ふじかけ短詩睦会（鳥取市）

晴着きたらおませいう子のピンカー
 嘘らしい話の目玉よく動き
 い服が着れるからお詣りついで行き
 うちの組長谷川一夫が二人いる
 父ちゃんのお嫁になると二年生
 同じ筆なのに父のさうに字が書けず

武敬富民梅喬
志子子子子

よそのママなんであんなに奇麗だ
誕生日うるさいエレキ持ちこまれ
中学生 奇抜な紳士服買った
地下タビをはいて不思議思いつき
パパの料理うまいとママに云えず食ひ
兄の小包みへ母はそっと何か入れ
手があるか足があるかと姉は産み
グジョウ 節もう唄えない祖父に
へそくりも。パパに云うぞおとこさ
何着ても似合う娘へ金がいり

多鶴子
清久
和枝
英子
廣司
克秋
政子
鎮也
上高
佳生
磯山
山女

松和扇輝その憲凡文俊菁日延笑悦文
風尾水子み次女晴健居夫子子子子
平

明
朗
川
柳
會

(大阪市)

田中多幸報

蜘蛛の巣に蜻蛉せみがくをくいておれず
晴着はるぎ着て腰にゴム輪ゴムをくひ込ませ
訪問きんもんを喜び友の有難さ
五月晴明はるみ治平年銀を振り
儲けの氣買物カゴでパンパンコヘ
宝石展たけ雲を二三度見損ない
ア煙草象牙のパイプを火がきつめ
乗車券買ふ身になつて席せきねらい
目惚れめどれもなけりや進まぬくし芸
商人の愛想笑も年とし期きいり
病やまいゝえ久かたぶりの高笑い
目惚れて財布のからに氣が付かず

久古一富茶憲一弘繁濁久源多
江堂休士坊明登生子水子川幸

誤植訂正 九月号19P、同情を覗みかえした精薄児 小松園氏作。 九月号43P、大阪の灯はあのあたり天の川―機見女氏作。

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 03 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL (011) 9184

・九 輪 水 煙・

▼この一年、苦しかったがまたその半面たのしかった。地元や地方の同人諸氏もよくガン張ってくださった。それからやはり故路郎先生の七光りや諸先輩の方々のお導きがあったから、今日この創刊一

周年記念号を出すこ

が出来たのである。いつか三夫さんがこの欄で書いたが「柳詒は柳社の顔である」この顔を汚がさないよう、こんごとも精進していくつもりでいる。

▼わたしは相変わらず句会をとり回っている。来いと云われるとイヤだと云えないので広島までも足をのばす。けっ

川 柳 塔 社 の

柳 笈 が 出 来 ま し た

サイズは本誌と同じです。
ちよつとイキなスタイルです。

下部をノリづけして柳箋の下部が折れたりまがったりしないようにしたのもあります。

1 冊 (50枚) 円
送料 6 5 円
3 5 円

きよくは句会が好きだからでもあるが、やっぱり一人でも購読者をふやしたいのが本音である。

▼只今、同人諸氏による倍加運動展開中である。よろしくお願いいたします。

(清水白柳)

・ 2 D K ・

★夾秋十月、二度目の十月号を送りだして、やはり感慨無量である。創刊号にかかったときは一行の句も文もなかった。まったくの白紙だった。それがこの一年間に毎月載せきれないほど書いていただけになった。

★この一年間、同人諸氏は総力を結集した。好郎氏や白柳

氏など毎月のように宛名書きから発送まで手伝われた。なかなか出来ないことである。

★いまは盤石の「番傘」さんも初期のころは水府先生も宛名書きから発送までされ、第五号のときには誤植を自分の手で書き直し、そのため宛

名書きや送本準備がおくれたので新婚そうそうの路郎、霞乃両先生の新居へ応援をたのみに行かれたそうである。こんなはなしを水府先生からうかがったことがある。

★こんど出来た川柳塔柳箋は用紙の下部が折れたりまがったりしないようにノリづけを下部にしたのもこしらえた。これは水府先生に教えていただいたのだが、多くの原稿用紙もそれを使っている。

★待望の路郎賞作家が決定。★表紙の絵をすこし大きくした。どんなものでしょうか。★責了が直っていいない。毎号申しわけないことである。☆目と健康はよく自身で守っていきたい、丈夫で長持ちするように。(不二田一三夫)



のむだけで…痔がしぼむ！

●新しい痔の内服薬

サ-カネッテン

★本剤の説明書御希望の方は下記へ



日本新薬株式会社

京都市南区西大路八条



・ 募 集 ・

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10月) 中島 生々庵選
近作柳樺 (10月) 田村 五郎選
課題吟 (各題5句以内)

朝 野田 葉舟 柳 中島 生々庵
グマデバ イ 野田 葉舟 柳 中島 生々庵
志 中島 生々庵

★原稿は四角字請原稿用紙に一枚以内、文字は楷書で新かなづかいにしてください。

新年号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10月) 中島 生々庵選
近作柳樺 (10月) 田村 五郎選
課題吟 (各題5句以内)

紙 酒 中島 生々庵
紙 酒 中島 生々庵
紙 酒 中島 生々庵

★川柳塔の投句は本社同人に限りません。
★用紙はなるべく柳電をご使用ください。

創刊一周年記念句会

日時 十月九日(日) 路郎賞作品発表!

会場 自安寺(おじいさん) 市電下日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

兼題 路郎賞作家表彰

席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 百五十円
西尾 正 後 山 中島 生々庵
尾 本 藤 阿 生 庵
栗 客 志 庵
選 選 選 選 選

★投句受付の方は切手50円同人

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市觀谷中之町20

川 柳 塔 社

電話 大阪 3985 番

11月の兼題 「ストップ」 野 生
「宿 直」 昭 式

GOLDEN
O.S.K

の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー

定価 百二十円(送料別)

半年分 七百五十円

一年分 千四百四十円(送料別)

昭和四十七年十月一日発行

昭和四十七年一月一日発行

川柳塔社

〒100 東京都千代田区千代田 1-1-1

主催 毎日新聞社

9月22日→11月27日

あやめ池大菊人形 源平総巻

豪華見流し 15場面



大菊人形館・源平時代参考館・大菊花壇
のほか、大自然博物館・たのしい乗りも
のと遊戯屋・大スポーツランド・動物園
白川村合掌造り民家など

▶円型大劇場は日本歌舞伎「秋のおどり」
野外劇場…日曜祝日豪華アトラクション

入場料…180円 こども90円(25人以上
の団体は割引) あやめ池駅前が遊園地

近鉄あやめ池遊園地

料理 も 電話 も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚 饅 蓬 菜 焼 売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストア・弁天阜頭港店・中之島サン・ストア

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十一年九月二十五日 印刷
昭和四十一年十月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 十月号

定価 百二十円

(送料六円)